

日本文學史教科書
完

116
135

文學士 藤岡作太郎著

日本文學史教科書

東京 大阪

開成館發兌

凡 例

この書は中學校、師範學校、高等女學校等の日本文學史の教科書にとてかきたるものにて、なるべく簡單ならんことを期したり。文學といふ語は廣義にとり、わが國における文運發達の大體を會得せしむるを目的とす。

太古より明治維新前までを四大期に別ち、各期をまた四條に細別す。條々概ね年代を以て序づといへども、文學の事、もとより精密なる期限を定むること能はず、たゞ大數をあくるのみ、第一章の如き、時に年數の出入なきにあらず。

人名は或は名をしるし、或は號を示して一定せず、よく世に知られたる方に従へるのみ、殊に著名なる人は、名と號と併せていだせるも多し。

文學士 藤岡作太郎著

日本文學史教科書

第一卷

凡例

この書は中學校師範學校高等女學校等の日本文學史の教科書に
とてかきたるものにて、なるべく簡單ならんことを期したり。

文學といふ語は廣義にとり、わが國における文運發達の大體を會
歴せしむるを目的とす。

一 太古より明治維新前までを四大期に別ち、各期をまた四條に細別
す。條々概ね年代を以て序づといへども、文學の事もとより精密な
る期限を定むること能はず、たゞ大數をあぐるのみ。第一章の如き、
時に年數の出入なきにあらず。

一人名は或は名をしるし、或は號を示して一定せず、よく世に知られ
たる方に從へるのみ。殊に著名なる人は、名と號と併せていだせる
も多し。

凡例



一 歌文の引例はつとめて省略す。教師はなるべく讀本のうちより求めいだして示すべし。

一 滔々たる古今の文學のうち、僅かに數項の引例は、いまだ生徒をして本文の意を會得せしむるに足らざるべし。引例に拘泥して却つて本文の意を忘れんことは、注意して矯正せざるべからず。

一 引例の諷誦すべきものも、意義の疏通を主として、節調の符號などは示さず。

明治卅四年七月

著者 しろす

目次

第一章	上古……………	一
一	太古の歌謠……………	一
二	祝詞宣命……………	四
三	古事記風土記……………	七
四	萬葉集……………	一〇
第二章	平安朝……………	一六
一	漢文學の隆盛……………	一六
二	三代集の撰進……………	二二
三	女流文學の隆盛……………	二七
四	歌論の勃興……………	三四
第三章	鎌倉室町幕府の世……………	三九
一	新古今集と軍記雜錄……………	三九

二	南北朝……………	四八
三	謠曲と連歌……………	五二
四	文學極衰……………	五九
第四章	江戸幕府の世……………	六三
一	文學復興……………	六三
二	元祿前後の盛運……………	六七
三	文運東遷……………	七九
四	寛政以來の盛運……………	八六
結論……………		九八

日本文學史教科書

藤岡作太郎 著

第一章 上古

一 太古の歌謡

太古より一三〇〇頃(舒明天皇の朝)までの大體

漢文學傳來

應神天皇の十五年(九四四)百濟王その臣阿直岐アチキを使として馬をわが國に貢す。皇子菟道稚郎子ウサミチノコ經典を阿直岐に學び、更にそのすゝめによりて百濟の博士王仁を徵す。阿知使主アチノシもついで來り、三人の子孫代々文事を掌る。これより漢文世に行はれて、公文官符みなこれを用ふ。阿直岐渡來以前にも、三韓との交通あり、從うて漢字も傳はりしならんが、いまだ公に行はるゝに至らず。またわが國には本來の文字といふべ

無文時代の歌謠

きものなかりき。この文字なき時代には、文學もなきか。文字なければ、後世の如き發達したる文學は望み得べからずといへども、歌謠は神代より既に存して、口々に傳誦せり。歌謠はもとは物に觸れ事に感じて自然に言語に聲調を整へていひいつるものにして、後世の題を得て後に思を凝らすが如きものにあらず。思想も極めて簡單にして、樸實に、喜を述べ、憂を遣り、兵氣を勵まし、時勢を諷し、親子兄弟男女等の愛を謠ふ。その調は、一句の字數三四五六七いづれとも定まらず、一首の歌の長短も定まらず、たゞ長短の句を相交へ、また多く疊句對句を用ひて、聽くものゝ感を深からしめたり。

漢文傳來以後の歌謠

漢文學渡來以後も、歌謠はこれがために大いなる影響をうくることなかりき。欽明天皇の十三年(二二二)百濟王佛像

經論を獻じて、佛教の功德を説く。ついで推古天皇の朝、聖德太子が佛教の興隆と文藝の進歩とに力をつくしたまふあり。これより遣唐使の來往絶えず、學生僧侶はこれに伴ひて支那に留學し、今は三韓を経ずして直ちに唐朝の文物を輸入するに至る。律令制度美術工藝等これがために燦然として光を放てりといへども、歌謠はなほ著しき影響をもうけずして紀元千三百年頃に至れり。その間世を経るに従ひて五七の句を重ねるもの次第に多く、その最も短きは卅一字の歌となり、漸く一定の式に傾けるが如し。

素盞鳴尊が須賀の宮を造りてよみたまへる歌、

八雲たつ出雲八重垣つまごみにやへがきつくるその八重垣を、

日本武尊の歌、

尾張に直に向へる尾津の崎なる一松吾兄を、一松人にありせば太刀佩けましを、衣着せましを、一松吾兄を。

二 祝詞宣命

太古より一四四一頃(奈良朝の終までの大體)

漢學傳來以後、詔勅の類多くは漢文にてかゝられたれど、その中に太古の式を守りて、國文の調に作られたるものあり、祝詞と宣命とこれなり。いづれも散文なれども、聽くものを感じしめんがために詞を飾り句を整へたること、や、歌謠の趣あり。

祝詞

祝詞は神に申す祭文なり。わが國民はわけて敬神の念深く、太古の政は即ち祭政一致の治にして、風雨順に、五穀豊かに、疫病息み、反亂收まらんことを、まつ神に祈る。この時によみあぐる文が祝詞にして、神事はつとめて昔の式のまゝに従へば、漢文大に行はれて後も、太古の風を存し、今日、諸社の祠官がよみあぐるものも、なほその式によれり。祝詞の文は

あまり長からず、その目的によりて文も異なれども、天孫降臨、開國紀元のさまより説き始めて、次に國家の安全を祈り、これを與ふる神に向ひて種々の供物をなす由を述べ、稱辭竟へまつらくと宣る。または、かしこみくも申すといふ句にて終れるもの多し。今に残れる最も古き祝詞は、神武天皇の頃既に作られたるもあるべく、またその後に出來たるもあるべく、これらを天智、天武二帝の頃に多少改めたるなるべし。さてその後にも作られたれども、いづれも前なるを模擬するのみにて、文學上の價は甚だ少し。

祈年祭の詞の一節 (祝詞)

辭わきて伊勢にます天照大御神の大前に白さく、皇大御神の見露かし
ます四方の國は天の壁たつきはみ國の退きたつかぎり、青雲のたなび
くきはみ、白雲のおり居向伏すかぎり、青海原は棹花ほさす、舟の艦の至
り留まるきはみ、大海原に舟みちつゝけて、陸よりゆく道は、荷の緒ゆひ

かためて、磐根木根ふみさくみて、馬の爪の至り留まるかぎり、長道ひまなくたちつゝけて、狭き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱うちかけて引きよすることの如く、皇大御神のよさしまつらば、荷前は皇大御神の大前に横山の如くうち積みおきて、のこりをば平らげくきこしめさむ。また皇御孫命の御世を、手長の御世と堅磐に常磐に齋ひまつり、茂し御世に幸はへまつるがゆゑに、皇吾陸神、神淵、神淵彌命と、鶺鴒もの頸根つきぬき、皇御孫命のうづの幣帛を稱辭、竟へまつらくと宣る。

宣命は天皇の百官庶民に宣りたまふ文にして、宣命、大夫うけてこれを朗讀し、段落の終毎に「もろくきこしめせと宣る」といふ。漢文にあるせるを詔勅といふに對して、國文の調にあるせるを宣命といふなり。これもよみあげて聽くものを感じしめんことを主とす。その體頗る祝詞に似たるが、時代の後れたるだけに、風體も新らし。宣命の今に残れるものにて最も古きは、續日本紀の中に存せるものにて、文武天皇

宣命

即位の時より桓武天皇の半まであり、その以前の宣命もこれと相似たるものなりしならんが、今存せず。平安朝以後はまた前者を模擬するのみ。

三 古事記風土記

殊に一二八〇頃より一三三八頃まで百年ばかりのこと。

國史の撰

漢文は佛教の傳來と共に盛んになり、文藝もこれより大いに發達す。推古天皇の廿八年（一二八〇）、聖德太子蘇我馬子と計りて國史を撰す、されど焼け失せて傳はらず。當時の文には、太子の十七箇條憲法等、漢文にて今に存す。そのうち天武天皇の朝、稗田阿禮といふものあり、博聞強記にしてよく上世の事を諳んず。天皇召して古來の史傳を誦せしむ。元明天皇の和銅五年（一三七一）、勅により太安麿が阿禮の口演に基

古事記

き記して奉れるもの即ち古事記三卷なり。神代より推古天皇の御代までの歴代の事蹟を述ぶ。文體は國語のまゝに寫さんことを主として、質實遒勁に、高調のところはまゝ句を重ね對を設けて文を飾れり。その神代の神異譚を寫せるところ殊におもしろく、ほゞ太古の人の思想を推知すべし。

古事記神代の一節

故こ、に速須佐之男命申したまはく、しからば天照大神に申して罷りなんと申したまひて、すなはち天に登上ります時に、山川悉に動み、國土みな震りきこ、に天照大神き、驚かして、我が弟の命の上り來ます故は、必ず善しき意ならじ、我が國を奪はむとおもほすにこそと宣りたまひて、すなはち御髪を解き、御髻に纏かして、左右の御髻にも、左右の御手にも、みな八尺の句瓊の五百箇の御統の珠を纏きもたして、背には千箇入の鞆を負ひ、五百箇入の鞆をつけ、また稜威の高靴をとり、帯ばして、弓腹ふり立て、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪なす蹴散かして、稜威の雄詰び踏み詰びて、待ちとひたまはく、など上り來ませると問ひ

日本書紀

されど漢文流行の風潮は、この國文體の古事記に満足せず、のち數年、また舍人親王、太安麿等に詔して、更に詳確なる國史を漢文にて編せしむ。養老四年(一三八〇)成る、これを日本書紀といふ。されど華麗なる漢文よりも樸實なる國文を貴しとして、識者は却つて古事記を取る。

たまひき。

六國史

その、ち醍醐天皇の朝まで、勅によりて國史を編せしめ、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄相繼いで成る、いづれも乾枯無味の漢文にて、朝廷の日記ともいふべきものなり。世に日本書紀以下これらを六國史と稱す。

風土記

古事記編成の翌年(一三七三)、畿内七道に命じて、國內の物産、土地の肥瘠、地名の由來、舊聞異事等を採録して奉らしむ、これを風土記といひ、爾來漸次撰進す。されど多くは散佚して、今に残れるは常陸、出雲、播磨、肥前、豊後等の部のみ。概ね味も

なき漢文にして、文學上たゞ稀に取るべきところあるのみ。

四 萬葉集

九七三仁徳天皇の元年頃より一四四一頃まで殆ど四百七十年のうち、殊に一三〇〇頃以後のこと。

漢文學

古事記以後は國史も漢文にて作り、祝詞宣命等のほかは散文は概ね漢文を用ふ。弘文天皇および天武天皇の皇子大津皇子よりのち、漢詩を作る人も少からず。聖武天皇の頃には、吉備眞備、安倍仲麿等唐に留學し、かの國の學士に比して耻づることなしと稱せらる。和歌は外國文藝の輸入にも妨げられず、却つて一般の文運の進歩に促されて、千三百年頃より漸く盛んに、殊に持統天皇その元年は一三五〇より奈良朝の終ごろまで百年に近き間は、柳櫻桃李の一時に色を競ふが如く盛んなりき。この時代の歌を集めたるものを萬葉

萬葉集

集廿卷とす。

萬葉集は孝謙天皇の朝、左大臣橘諸兄これを撰び、後久しからずして、大伴家持の補ひたるものならんといふ。集中、仁徳天皇より淳仁天皇までの間の歌あれども、舒明天皇以前は二三首に過ぎず、それより後の歌多し。歌には長歌、短歌、旋頭歌あり。長歌は句數に制限なく、五七の句をいくつも連ねて五七七にて結び、別に反歌として短歌を添ふ、これは本歌の意を概括し、また足らざるところを補ふものなり。短歌は五七五七七と連ねて、即ち卅一字の歌なり。旋頭歌は五七七を二度重ねたるものなり。世を経るに隨ひて歌の形式はかくの如く定まりたれど、一二字の過不及は許さる。殊に萬葉集の歌は、平安朝以後の如く拘束せられずして、詞の使用も自由なり。

人麿と赤人

集中の歌人のうち、殊に有名なるは柿本人麿、山部赤人なり。そもく、天智天皇は皇太子として大化改新の政をなし、世に中興の聖主と稱せられたまふ。天武天皇その後をうけて、また英明の君なり。紀綱こゝに張り、外國文明の採用と共に國民の自信も堅くなりぬ。人麿はこの際に長じて、持統、文武二帝の頃の詠多し。その歌には開國紀元より堂々と國體の存するところを説くこと、祝詞の如くし、次いで己が感情を叙ぶることしばしばあり。赤人は少しく人麿に後れて、聖武天皇の頃の人なり。人麿は長歌に長じ、赤人はむしろ短歌に長ず。二人の歌いづれも雄渾にして高雅、古今よく及ぶものなく、漢學佛教ともに盛んなれども、その直接なる影響をうけずして、國民が本來の性情を詠じたり。

その他の歌人

頃よりまた衰頹の兆を顯はせり。聖武天皇篤く佛教を信じ、たまひて、佛寺美術の觀はいはゆる天平時代の隆盛を致せりといへども、資財ために費え、紀綱や弛む。孝謙天皇以後は國政また平かならず。奈良朝の盛時は既に過ぎたり。山上憶良、大伴旅人、同家持はこの頹勢を代表すべく、とりくに勝れたるところもあれども、前の二人に及ばず。憶良は赤人と時を同じくし、かつて遣唐少録たり。その歌殊に漢學の影響多く、また思想は豊富なれども、用語は粗雑なり。旅人も同時の人にして、征隼人持節大將軍となる。家持はその子にして、持節征東將軍となる。されど意を得ず、一生を不平のうち、に終りしが如し。この父子のほか、大伴の一族に、當時また歌をよくせるもの多し。

萬葉集の特性

要するに萬葉集の歌は、率直なる感情をありのまゝに顯は

し、絶えて浮薄虚偽の嫌なし。措辭の法、五七の句を連ね、しばしば枕詞を置き、對句を設けて修飾す。その調雄健にして後世の柔弱なる風と相反す。たゞ思想の複雑ならず、變化少なきは、時代の上より止むを得ぬことなり。

吉野宮の長歌およびその反歌

人麿

やすみし、わが大王オホノミカド神ながら神さびせすと、吉野川たぎつ河内カワチに、高殿を高しりまして、上りたち國見をすれば、たゞなづく青垣山アヲノ山神ヤマノカミの奉る御調ミツナリと、春へは花かざしもち、秋たてばもみち葉かざし、遊副川ユヅノの神も、大御食オホミケに仕へまつると、上つ瀬に鶴川をたて、下つ瀬に小網コヅナさし渡し、山川もよりてつかふる神の御代かも。

山川もよりてつかふる神ながらたぎつ河内に船出せずかも。

富士山の長歌およびその反歌

赤人

天地アマノの分れし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる富士の高嶺タカノを、天の原ふりさけ見れば、わたる日の影も隠るひ、照る月の光もみえず、白雲もい行きは、かり時じくぞ雪はふりける。語りつき言ひつきゆかむ、富士の高

嶺は、

田兒の浦ゆうちいでて見れば、真白くぞ富士の高嶺に雪はふりける。

當時の短歌の例

近江の湖ゆふなみ千鳥、ながなければ心もしぬに古おもほゆ。 人麿
潮ひなば玉藻かりつめ、家の妹が濱裏ハマウラこはば何をしめさむ。 赤人
士シやも空しかるべき、萬代に語りつくべき名は立たずして。 憶良
いざ兒ども、香椎の湊ウラに、白妙の袖さへぬれて朝菜つみてむ。 旅人
わがほりし雨はふりきぬ、かくしあらば。 言コトあげせずとも年はさかえむ。 家持

假名の發達

太古より奈良朝までを概していふに、文學上には和歌をとるべし、祝詞、宣命も聲調を重んじて、歌謠に近きところあり、漢文はなほ實用を主とす。さてこの和歌および祝詞、宣命、古事記等をするに、わが國の本來の文字なく、公私の文書すべて漢文を用ふる時、いかにして國語のまゝをうつしか、他なし、漢字を假りしなり。たゞし意味の通ずるのみの用には、その訓を假り用ふれども、かくては國語をありのまゝに寫しがたし、故にその義に關係なく、その音のみを假りて、この缺を補ふ、天地を安米都知とかくが如し、これを萬葉假名と稱す、萬葉集、祝詞、宣命、古事記等、その用字法に多少の

相違ありといへども、要するに大同小異にして、宣命には互爾波を小さく注の如くかき、古事記には漢文體と假名がきと相交へたるが如きを異なりとす。されどかくの如き假名は、いづれも字畫と字數と共に多くして、極めて不便なるより、いつしかその字畫を省略して、遂に片假名を生じ、また草體の漢字を簡易にして、遂に平假名を生ず。片假名平假名ともに一時に成りたるにあらす。自然の淘汰を経て出來たるものにて、そののち達識の人いでて、片假名を五十音圖に編し、平假名にていろは歌を作る。世に五十音圖を編したるを吉備真備とし、いろは歌を作れるを僧空海とす。空海は或は然らん、真備といふは當らじ、けだし五十音圖も空海以後に出來たるならん。かくて片假名平假名ともに奈良朝より既に漸次に出來たるなるべしといへども、その普く世に行はれたるは次期にあり。この假名の弘通こそ、平安朝に國文和歌の勃興せし大原因なりけれ。

第二章 平安朝

一 漢文學の隆盛

一四四二(桓武天皇の延暦元年)より一五

嵯峨天皇の朝の漢文學

學校と學風

五〇頃(宇多天皇の朝)まで百餘年のこと。

漢字のはじめて傳はりしより、學問といへばいつの世にも第一に支那の文學儒學を挙げたりといへども、この時代の如く漢文學のみ行はれしことは稀なり。中にも嵯峨天皇の時を甚だしとす。既に大化改新の頃より漢學は興隆の運に向ひ、爾來年を重ねるに隨ひて益盛んなりしが、嵯峨天皇は殊に漢文學を獎勵したまへば、その流行は驚くべく、大學、國學のほか、私學の設立も多し。僧空海は綜藝種智院を、和氣廣世は弘文院を、藤原冬嗣は勸學院を、嵯峨天皇の皇后は學館院を、在原行平は獎學院を、淳和天皇の皇子恒貞親王は淳和院を立て、いづれも子弟を教ふ。教ふるところ經書律令算術もあれども、唐朝の學風をうけて、殊に詩文を重んじ、かの國の詩文集にては、最も文選、白氏文集を愛讀す。

詩集の撰

わが國の詩集は奈良朝の懷風藻(一四一一)をはじめとす、天武・持統・文武三帝の頃の詩を集めたり。そののち凌雲集、文華秀麗集、經國集の撰あり、いづれも嵯峨天皇の弘仁前後の詩を集む。平城、嵯峨、淳和三帝みな詩を詠じたまひ、嵯峨天皇の皇女有智子、内親王もこれをよくしたまふ。當時、文人學者多かりしが中に、殊に詩文に秀でしは僧空海、小野篁なるべし。

空海と篁

空海は極めて多能なり、わが國における真言宗傳來の祖たるのみならず、書をよくし、また詩文に秀づ。性靈集はその詩文を集めたるものなり。また文鏡秘府論を作りて詩文の格を論ず、けだし邦人が詩文を論せしはじめなるべし。年六十二にして寂す(一四九五)。篁は清原夏野等と令義解を撰す。性狷介にして世と相容れず、かつて嵯峨天皇の怒に觸れて隱岐に流さる。されど天皇もその詩才を愛したまへり。篁曰く、唐に白樂天あり、文を巧にすと傳ふと、樂天もまた曰く、日本に小野篁あり、詩をよくすと聞くと。

清和天皇以來の漢文學

清和天皇以來は都良香、島田忠臣、橘廣相、菅原道真、紀長谷雄、

三善清行等詩文に長ず。中にも道真が平易なる語を以て悲慘なる境遇を詠じたる詩は、今に國民の同情をひくこと篤し。されど要するにわが國の詩文は、はじめより支那六朝の文辭の修飾を主とせる四六駢儷體に則りて、却つて真情の流露を妨げたるに、平安朝浮華の風はひいて、愈、語句の配置にのみ苦心し、綺麗の辭を喜ぶに至り、漢文學はこれより漸く衰微す。

道真

道真の祖を清公ホトギスといひ、父を是善といひ、代々文學を以て家を立つ。道真殊に重望あり、宇多天皇の寵遇をうけて、醍醐天皇補佐の重任にあたる。讒によりて太宰府に流され、配處に薨す(一五六三、年五十九)。その著に類聚國史あり、その詩文を集めたるものを菅家文草、菅家後草といふ。

和歌の風調の變遷

嵯峨天皇の頃は、漢文學流行を極めて、和歌は一時屏息のさまなりしが、清和天皇以來、やゝ頭を擡げて、漢詩と並び行はる。これも平安朝逸樂の風を帶び、また漢詩の浮華の弊を受

けて、柔美輕佻の體をなす。奈良朝は歌人即ち武人なるも多
く、隨うて和歌も豪壯の氣ありしに、今は遊蕩なる貴族が贈
答の具となれば、殊に盛んなるは戀の歌なり。強健なる奈良
朝五七の調はこゝに至りて七五の調に變じ、長歌は殆ど衰
滅せんとし、爾來この風永く變らず。在原業平は當時の最も
著しき歌人にして、僧正遍昭、小野小町、文屋康秀、大伴黑主、藤
原敏行等これについて名あり。

業平

業平は平城天皇の皇孫なり、體貌嫺麗にして、放縱拘はらず。當時惟喬親王
清和天皇の皇兄にして、天位に即くを得ず、洛北小野に隱る。業平もと親王
と親し、その不遇を痛み、その閑居を訪ひて、悲んで曰く、

忘れては夢かと思ふ、思ひきや雪ふみわけて君を見んとは、

また武藏隅田川にてよみし歌の如きは、人口に膾炙す、曰く、

名にし負はばいざこと、はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと。

神樂催馬樂

當時また神前に樂器に合せて奏するうたひ物に、神樂催馬

伊勢物語と竹
取物語

樂あり、平安朝の半を過ぐる頃まで盛んに行はる。神樂のう
ちの採物の歌といふは、供物を捧ぐるとき、謠ふ普通の短歌
にして、神樂のうちの前張と催馬樂とは、多くは民間の俚歌
より取る、これらの歌は奈良朝の末よりこの期にかけての
もの多かるべし。
假名の弘まるに隨ひて、散文もこれにてかゝれぬ、伊勢物語
と竹取物語との如し、伊勢物語は業平が己の歌に加へて、昔
の歌をも取り、作意を添へて面白くかきたるものなるべし。
その文の簡潔なるとその歌の幽遠なるとは、よく及ぶもの
なし。後人これに蛇足を添へて、眞偽頗る辨じがたし。竹取物
語は伊勢物語と前後して出來たるものにして、その著者定
かならず、一體の趣意は、むかし竹を切り出して生計とせる
翁ありしが、ある時竹の中より一少女を得たり、容貌美にし

て光るが如し、赫耶姫といふ貴人顯官娶らんとすれども應
ぜず、天皇召せども辭し奉りて、遂に月宮に歸り去りきとい
ふにあり、けだしわが國の傳奇體小説のはじめなるべし、そ
の文また極めて古樸なり。

二 三代集の撰進

一五五一頃より一六五〇頃一條
天皇の朝まで百年ばかりのこと。

延喜時代

平安奠都以來、泰平年久しく、地方は離叛すれども、都人は知
らざるが如く、詩歌管絃に日を送る、世に醍醐天皇の代を延
喜の聖代と稱す。この時國民の自信は益發達し、繪畫には巨
勢金岡ありて、美術を國風に純化し、文學には和歌の勢盛ん
になりて、漢詩を壓す。まして既に宇多天皇の朝(一五五四)に、
唐の亂によりて遣唐使も廢せられたれば、漢文學の研究は

古今集

漸く衰ふ。紀長谷雄、三善清行等の漢學者老いて、紀貫之、凡河
内躬恒等の歌人新たに出で、こゝに弘仁時代の漢詩文隆盛
の反動は和歌勃興の時代となりぬ。延喜五年(一五六五)紀貫
之、凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑勅を奉じて古今和歌集廿卷
を撰び、萬葉集以後の歌と當時の歌とを集む。歌體こゝに至
りて確立し、後世よく大いに變ずるものあることなく、歌集
の勅撰も一にこれに則る。

貫之と躬恒

延喜時代の和歌も、また花月の景戀愛の情をのみ歌ふ平安朝以來の通弊
は免れずといへども、なほ花實兼ね備はれりと稱せらる。當時の歌人は貫
之、躬恒を最とす。二人殊に言語の修飾に移め、しかもまた思想を練る、後世
人麿赤人について和歌の宗とす。

ひとはいさ心もしらす、故郷は花ぞ昔の香ににほひける。 貫之
櫻ちる木の下風は寒からで、空にしられぬ雪ぞふりける。 同
逢坂の關の清水にかけみえて、いまや曳くらむ望月の駒。 同

春の夜の間はあやなし梅の花色こそみえね香やは隠る、
 躬恒
 今日のみと春を思はぬ時だにもたつこと易き花の陰かは、
 同
 住の江の松を秋風ふくからに聲うちそふる沖つしらなみ
 同
 君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をもしる人ぞしる、
 友則
 山里は秋こそ殊に侘しけれ鹿のなく音に目をさましつ、
 忠岑

貫之の土佐日記等

貫之は和歌のみならず、散文にも力をつくし、かば、これより假名文大いに世に行はる。貫之の作に大堰川行幸和歌序および古今和歌集序あり、いづれも漢文の四六駢儷體より出でて華麗に過ぐ。貫之また晩年に土佐日記を作る。これは著者が土佐の國守の任果て、京に上りし海路の日記にして、自ら一婦人に擬して書きたり、文體簡淨にして諧謔を交へ、後世國文の軌範と稱せらる。

土佐日記正月廿一日の條

廿一日、卯の時ばかりに船いだす。みな人々の船いづ、これをみれば春の

海に木の葉しもちれるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらむ。風もふかす、よき日いできて漕ぎゆく。この間につかはれむとて附きてくる童あり、それがうたふ歌、

なほこそ國の方は見やらるれ、わが父母ありとし思へば、かへらや、
 とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつ、漕ぎくるに、黒鳥といふ鳥、巖の上に集まり居り、その巖のもとに浪白くうちよす。櫂取のいふやう、黒鳥のもとに白き浪をよすとぞいふ。この詞何とにはなけれど、物いふやふにぞきこえたる、人のほどに合はねば咎むるなり。かくいひつ、ゆくに、船君なる人、浪をみて、國よりはじめて海賊むくいせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。七十八は海にあるものなりけり。

わが髪ハゲの雪と磯邊イソノヘの白浪シロナミといづれまされり、沖つ島守、
 櫂取いへ。

天曆時代

村上天皇の朝は、天曆の聖代として、延喜時代と併せ稱せらる。天慶承平の亂こゝに終りて、都人は太平に安んじ、學者文人また輩出す。延喜時代に比するに、この時はや、漢文復興せ

後撰集

拾遺集

宇津保物語等の小説類

るが如く、兼明親王(前中書王)、大江朝綱、菅原文時等詩をよくし、天皇もまたよくしたまふ。和歌も盛んなりといへども、古今集の頃に比するに、實ありて花なき觀あり、珠を轉ばず如き好調は失はれたり。天曆五年(一六一二)、大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城に詔して、昭陽舍(梨壺)にて萬葉集をよみ説かしめ、併せて古今集以後の和歌を撰ばしむ。この集を後撰和歌集といふ。そのち拾遺和歌集の撰あり、けだし華山天皇の御自撰ならん。古今、後撰、拾遺を併せて世に三代集といふ。

散文も漸次複雑となりて、こゝに宇津保物語を生ずるに至る。宇津保は人生を旨と寫せる寫實小説のはじめなるべし。清原俊蔭の孫仲忠といふ貴公子を主人公とし、貴宮といふ姫君をこれに對せしめて、宮廷の状態を寫せり。世にこれを

道長得意の時

源順の作と稱すれども、定かならず。順は博學の人、和歌詩文ともによくし、また和名類聚抄を編す。なほ當時の小説に落窪物語あり、落窪の君とて繼母に苦しめられたりし女の、左近少將なる男に愛せられて、立身出世せりといふ譚なり。大和物語は伊勢物語に倣うて作り、歌を主とせし小話を集めたるものにして、これも同じ頃のものなるべし。右大將道綱の母が蜻蛉日記の精細なるもまた愛すべし。

三 女流文學の隆盛

一六五一頃より一七三〇頃(後三條天皇の朝)まで八十年ばかりのこと。

この時代の上半、一條、三條、後一條、三帝の頃は、平安朝の最も花やかなる時なり。御堂關白道長大政を握りて、藤原氏の勢力絶頂に達し、一門宮廷に跋扈して、花月の遊に耽れば、文藝

も隨うて光彩を放てり、繪畫には巨勢廣高、宅磨爲成等あり、彫刻には僧源信、惠心僧都、佛師定朝等あり、いづれもますます邦人固有の風を發揮す、文學も漢文學はいよく、衰ふ男子はなほこれを唯一の學問とし、具平親王、後中書王、藤原公任、四條大納言等の文人あれども、當時の女流が假名文の進歩せるに比すべくもあらず。

當時の廷臣は京都に蟄居して、地方の事を知らず、行政軍事を賤みて宴飲管絃に荒み、後宮に出入して宮女と和歌を贈答するを事とす、權力扶植の手段としては、名流貴族おのその女を後宮に納れて、皇室の外戚とならんとす、かくて禁中には女御更衣多く、互に榮華を競ひ、才能ある女子を侍女として相誇る、さればこそ當時の女流には文學に秀でたるものも輩出せしにて、その歌ふところ、書くところ、京都の

上流の風俗

佛教の弘布

清少納言の枕草紙と紫式部の源氏物語

こと殊に宮廷のこのみ多く、その風の専ら優美柔弱に流れたるも、これがためなり。

佛教はこの頃いよく、廣く行はれて、年忌を修し、冥福を祈るはもとより、出産疾病にも僧侶を招きて誦經修法せしむるなど、何事にも佛事を行ふ、されば僧侶は大いに世に重んぜられ、貴紳の人にして出家するも少からず、文學もこの影響をうけて無常をはかなみ、應報を恐れ、すべて悽惋なる風を帯びたり。

當時の女流の最も文才あるを清少納言、紫式部とす、二人はたゞに當時の第一流と稱すべきのみならず、古今を通じてまた第一流に數ふべし、清少納言は清原元輔の女にして、一條天皇の皇后定子、中關白道隆の女、道隆は道長の兄なり、に仕ふ、著はすところ枕草紙あり、見聞せるまゝ、思ひつきたる

まゝを述べし隨筆にて、文章簡潔にして奔放觀察の極めて鋭利なるを見る。紫式部は藤原爲時の女にして、一條天皇の中宮彰子(上東門院といひ、道長の女なり)に仕ふ。源氏物語五十四帖はその作なり、光源氏といふ貴族を主人公として、上流社會の生活を寫す。照應波瀾最も整ひ、諄々として説き去り説き來り、篇中の人物一々その特性を發揮せるが中に、光源氏の妻紫、上は式部が苦心して女子の模範として寫せるものなり。世人がこの書をわが國第一の小説といふも、決して過褒にあらず。式部別に紫式部日記を作りたれども、これは文學上の價少し。なほ式部と全じく彰子に仕へたるものに和泉式部、伊勢大輔等あり。和泉式部の女に小式部内侍あり、道長の妻の侍女に赤染衛門あり、共に和歌をよくす。榮花物語は當時の上流の事實を記したるもの、世に衛門の作と

和泉式部等

稱すれども、強ちに信すべからず。けだし當時の宮女の日記類を集めて、後に何人かがその體裁を一にしたるものなるへし。

うつくしき物 (枕草紙の一節)

瓜にかきたる兒ちひの顔、雀の子のねすなきするに躍りくる。また紅などつけてすゑたれば、親雀の蟲などもてきてく、むるもいとらうたし。三ばかりなる兒の、急ぎてはひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指オビにとらへて、大人などに見せたる。いとうつくし、あまにそぎたる兒の、目に髪カミの覆フクひたるをかきはやらで、うち傾きて物などみる。いとうつくし、手細テノコがけにゆひたる腰の上の白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童テウの、さうそきたてられてありくも、うつくし、をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくし。むほどに、かいつきて寐入りたるも、らうたし。雛ヒナの調度テウダ、蓮レンの浮葉ウヅハのいと小さきを、池イケよりとりあげて見る。葵アオイの小さきもいとうつくし。何もく、いと小さき物は、いとうつくし。いみじう肥えたる兒の二フタばかりなるが、白ううつくし。きが、二藍フタアイの薄物ウスモノなど衣キヌ長くて、手細テノコあけたるが、

はひいでくるもいとうつくし。八九十ばかりなる男兒の聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。雞の雛の脚高に白うをかしげに衣短かなる様にして、ひよくとかしがましくなきて、人の後にたちてありくも、また親のもとにつれだちありく見るも、うつくし。鴨の子、舍利の壺、撫子の花。

光源氏が須磨のわびすまひ（源氏物語須磨の巻の一節）

須磨にはいと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の關ふきこゆるといひけん浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなぐ哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人すくなにてうち休みわたれるに、一人目をさまして、枕を敬て、四方の嵐を聞きたまふに、浪たゞこゝもとにたちくるこゝちして、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりけり。琴を少しかきならしたまへるが、われながらいと凄うきこゆれば、彈きさしたまひて、

こひわびてなく音にまかぶ浦浪は、思ふ方より風やふくらん。とうたひたまへるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるにしのばれて、あいなう起きあつ、涙をしのびやかにかみわたすげに、いかに思ふらんわが身一により、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつ、思ふらん家を別れて、かく惑ひあへると、おぼすにいみじくて、いとかく思ひ

沈むさまを、心細しと思ふらんとおぼせば、晝は何くれとたはぶれ言うち、のたまひ紛らし、徒然なるまゝ、にいろくの紙をつぎつ、手習をしたまひ、珍らしき様なる唐の綾などに、様々の繪どもをかきすさびたまへる。屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあり、人々の語りきこえし、海山の有様を、遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゞすまひ、二なくかき集めたまへり。この頃の上手にすめる千枝、常則などをめして、作繪つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有様に、世の物おもひ忘れて、近うなれつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前裁の花いろいろさき亂れおもしろき夕暮に、海みやらる、廊に出でたまひて、佇みたまふ御様のゆゑ、しう清らなること、所からはましてこの世のものともみえたまはず、白き綾のなよ、かなる紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯しどけなく、うち亂れたまへる御様にて、釋迦牟尼佛弟子となりのりて、ゆる、かによみたまへる、また世にしらすきこゆ、沖より舟どものうたひの、じりて漕ぎゆくなどもきこゆ。ほのかにたゞ小さき鳥のうかべるとみやらる、も心細げなるに、雁の列ねてなく、聲機に音がへるを、うちながめたまひて、御涙のこぼる、をかきはらひたまへ

道長薨後の文學

る御手つき黒木の御數珠にはえたまへるは……人々のこゝちみな慰みにけり。

道長薨じてのち、藤原氏の勢や、傾き、國運もまた振はず。地方には平忠常の亂、前九年の役あり、武人漸く實力を養ひ來る。かくて宮廷に跋扈せし藤家の衰ふると共に、文學もまた漸衰の運につく。當時、藤原明衡は本朝文粹を編して邦人の漢詩文を輯め、源隆國(宇治大納言)は今昔物語を作りて和漢天竺の雜談を集む。女流には大貳三位、菅原孝標の女、相模、周防内侍等あり。大貳三位は紫式部の女にして、狹衣といふ小説を著はしたれども、源氏物語に及ぶべくもあらず。孝標の女は更科日記等を著はして名あり。

四 歌論の勃興

一七三一頃より一八四五(安徳天皇崩御の年)まで百十五年ばかり、いはゆる院政時代の事。

院政時代の風

後三條天皇天資英邁、藤原氏を抑へて親しく政を視たまふ。白河天皇父帝の風あり、讓位の後も院中に政を聽きたまひ、鳥羽、後白河二帝もこれに倣ひたまふ。かくて安徳天皇の朝まで百十餘年はいはゆる院政の世なり。院政の世となりて紀綱や、張り、文運も觀を更めたりといへども、白河、鳥羽二帝もと驕奢を好みたまひ、君臣ともに容儀を修すること婦人の如く、風俗浮華に流るれば、文學もおのづから香なき綵花の趣あり、深遠なる思想なくして、たゞ詞花言葉を飾るに過ぎず。

大鏡等

詠歌の流行

この時代に於て散文の見るべきは、わづかに大鏡等の存するのみ。大鏡は鳥羽天皇の頃なる藤原爲業の作といへど、定かならず。史記の體にならひて作れるものにて、わが國の國文體の歴史のはじめなり。散文はかく少けれども、短歌は頗

る盛んなり。白河、鳥羽の離宮に月雪花の遊觀たえず、遊觀あれば必ず詠歌あり、また既に行はれたりし歌合の類ますます流行して、巧を競ひ技を闘はせば、短歌の流行したるも自然の勢なるべし。歌風は漸く變化し、今や古今集時代の古風を喜ばずして、清新の體、綺麗の調を愛す。

大鏡にならひて作れる歴史には水鏡、今鏡、増鏡等あり、水鏡は簡單なるものにて味少なし、藤原忠親中山内大臣の著にて、この期の末頃のものなるべし。今鏡は著者定かならず、高倉天皇の頃に作られたるものなり、増鏡は遙かに下りて南北朝の頃に出來たり、これも著者明らかならず。

歌集の勅撰

拾遺集以來、歌集の勅撰は一時中絶せしに、白河天皇の朝、藤原通俊、俊後、拾遺集を撰進す。通俊は大江匡房と共に才和漢を兼ね、源經信また當時著名の歌人なり。崇徳天皇の朝、白河法皇の院宣によりて、經信の子俊頼、金葉集を撰ぶ。その頃、藤原基俊、俊頼と優劣を争ふ。詞華集は藤原顯輔が近衛天皇の朝

に崇徳上皇の旨をうけて撰べるもの、千載集は藤原俊成が後白河法皇の旨をうけて次期のはじめに撰べるものなり。顯輔は六條家の祖にして、その子に清輔および僧顯昭あり、俊成は二條家の祖にして、その子に定家および養子僧寂蓮あり。されど六條家は幾ばくもなく衰へて、また振はず。

夕されば門田の稻葉おとづれて、蘆のまろやに秋風ぞふく。 經信
うづらなくまの、入江の濱風に、尾花波よる秋のゆふぐれ。 俊頼
昔みし人は夢路にいりはて、月と我とになりけるかな。 基俊
夕されば野邊のあきかせ身にしみて、鶉なくなり、深草の里。 俊成

歌論の勃興

歌合にわが方の美をあげ、敵手の疵を索めて、互に論難品評し、詠歌に寢食を忘れて相勵めば、歌論の學はこゝに勃興するに至れり。歌論はもと支那の詩論より出でたり。古くは藤原濱成、僧喜撰などその法式を立てたりきといへども、信じがたし。その體を備ふるに至りしは、藤原公任の新撰髓腦、和

歌九品等をはじめとすべし。さてこの時代に至りては、俊頼の無名抄、基俊の悦目抄、清輔の奥儀抄、袋草紙、顯昭の袖中抄、俊成の和歌肝要、古來風體抄など續々世に出でて、和歌の風體を論ず。されどいづれも深遠なる考究あるにあらずして、淺薄なる形式の論、無益なる舊例の争のみ。

今様朗詠

うたひ物としては神樂、催馬樂も珍らしからず、平安朝の中世以來、朗詠、今様盛んに行はる。朗詠は曲節を設けて詩句短歌を朗吟するなり。今様は七五の句を重ねたるものにて、その句數の四なるもの殊に多し。いろは歌の如きも即ちその一にして、平安朝のはじめに既に佛徳を讚したるものなど見えたりしが、この時代の婉柔の時様を好む風に投じて、わけて盛んに行はれ、ついで次期にも及べるなり。

舊都の詠 (今様)

藤原實定

古き都をきて見れば、
月の光はくまなくて、

淺茅が原とぞなりにける。
あき風のみぞ身にはしむ。

第三章 鎌倉室町幕府の世

一 新古今集と軍記雜錄

一八四六より一九九三幕府滅亡の年まで百四十八年、即ち鎌倉幕府の世のこと。

鎌倉室町時代
一般の風

鎌倉室町幕府の世は、概するに武人勢を得て文事を重んぜず、文筆の業ために衰へ、自在に想像力を用ひたる著作は見らるべからずして、古事來歴もしくは見聞の事蹟を記述したるものあるのみ。

鎌倉初世の盛
運

源頼朝幕府を鎌倉に開きて政權を握り、政體ここに一變す。この時まで凡そ三十年の間、京都は源平二氏が争鬪の衝となりて、上下堵に安んぜざれども、なほ貴紳はこれに關せず。

新古今集

して吟咏唱和せり。加ふるに關東の勝利は却つて都人を刺戟して、鎌倉は政治の上に新たに活動せる間に、京都は文藝の上に更に生氣あり。かくて鎌倉幕府の世殆ど百五十年の間、最も見るべきは、そのはじめ三四十年間にあり。繪畫には春日光長、藤原信實等、彫刻には佛師運慶、快慶等をいだせるもこの時にして、文學は前期に繼いで和歌最も盛んなり。元久二年(一八六五)後鳥羽上皇の勅によりて源通具、藤原有家、同定家、同家隆、同雅經新古今集を撰進す。古今集よりこの集までを八代集といふ。そのうち古今集とこの集と殊に勝れたり。既に前期に歌論を考究し、辭句を洗鍊したるもの、ここに至りて一段の精彩をつけ、流麗巧緻なる一體をなす。新古今集時代に歌人輩出せるが、後鳥羽、土御門、順徳の三帝ともによくその道を得たまひ、精神には藤原良經(後京極攝

當時の歌人

政、及び定家、家隆等、武人には將軍源實朝等、祠官僧侶には鴨長明、慈圓、寂蓮、西行等、婦人には式子内親王、皇嘉門院別當等、わけて勝れたり。

定家西行等

後鳥羽天皇の御口傳、順徳天皇の八雲御抄、いづれも歌學の書なり。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽高し。著はすところ詠歌大概、明月記、拾遺愚草等あり。年八十にして没す(一九〇二)後世その流を亞ぐもの、貫之と并べて和歌の聖とす。その子爲家および爲家の妻阿佛尼も歌に熟す。十六夜日記は阿佛が東下の紀行なり。西行はもと武人なり。世を厭ひて出家し、諸國を行脚し、見聞廣ければ、詠するところ面目頗る新たなり。その歌を集めたるを山家集といふ。

吾こそは新島守よ、隱岐の海の荒き浪風、心してふけ。 後鳥羽上皇
 足柄の關路こえゆくしの、めに、一むらかすむ浮島が原。 良經
 武士の矢並つころふ小手の上に、霞たばしる奈須の篠原。 實朝
 あけばまた秋の半もすぎぬべし、傾く月のをしきのみかは。 定家
 見わたせば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮。 同
 風そよぐ檜の小川の夕暮は、御袂ぞ夏のしるしなりける。 家隆

當時の散文

滋賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りていつる有明の月 家隆
吉野山やがていでじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん 西行
道のへの清水流る、柳陰しはしとしてこそたちとまりけれ 同

長明の方丈記

平安朝の中世以來漢文學漸く衰へ、上流の人はなほこれを第一の學問となせども、多くは純粹なる漢文をかきえず、ここに和漢混交の一體を生ず。衰ふるは興る基にして、この文體は國文の優美に漢文の道勁を交へ、幽玄なる佛語をさへ加へて、遂に後世通用の文となりたるなり。この文體を以て記したるものにて最初に成功せるは、鴨長明の方丈記等なるべし。長明もと賀茂社山城の祠官なりしが、紛擾の世を厭ひて日野城山に隠る。方丈記はその始末をしるせる短篇なり。なほ長明の發心集、西行の撰集抄、平康頼の寶物集等あり、いづれも見聞のまゝの雜錄なるが、方丈記の絢爛なるに及ばず。

軍記類

この和漢混交體の大いに光彩を放てるは、源平争鬪の始末をしるせる軍記類なり。そもく源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものゝ感懷は、うたゝ假作小説よりも深し。こゝに於て軍記類の作あり。その最初に出でたるは保元物語、平治物語にして、二書ともに葉室大納言時長の作と稱せらる。文章頗る質實なり。ついで平家物語あり。僧慈圓に扶持せられし信濃前司行長入道生佛の作と傳ふ。これは曲節をつけて諷誦せんがために作られしものなるべく、その體悽惋優美を主とす。源平盛衰記はけだし平家物語を補訂大成せしものなるべく、文章華麗にして、漢語を交ふること平家物語より多し。これらの軍記は製作の時代たしかならざれども、いづれも源平争鬪の世より建長年間までの作なるべし。

佛教の影響

社會の變亂はおのづから人に厭世の念を懷かしむるに、佛教は從來の腐敗の反動として、禪宗、淨土宗、眞宗等、或は支那より傳はり、或はわが國に起りて、大いに人心を聳動したれば、文學にも佛教思想の現はれたること、平安朝よりも更に多く、至るところ穢土を厭離し、淨土を欣求する由の辭なきはなし。この傾向は鎌倉室町幕府の世を通じて最も盛んなり。

大原御幸の一節 (平家物語)

遠山にかゝる白雲は、ちりにし花のかたみなり、青葉にみゆる梢には、春のなごりぞをしまる、卯月二十日餘のことなれば、夏草のしげみが末をわけいらせたまふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡たえたるほどもおぼしめしやられて哀なり、西の山の麓に、一宇の御堂あり、即ち寂光院これなり、古う造りなせる泉水木立よしある様の所なり、いらかやぶれては霧不斷の香をたき、とぼそおちては月常住の燈をか、ぐともかやうの所をや申すべき、庭の若草しげりあひ、青柳

絲を亂りつ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる、中島の松にかゝれる藤波のうら紫にさける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりもめづらしく、岸の山吹さきみだれ、八重立つ雲のたえまより、山郭公の一聲も、君の御幸をまちがはなり、法皇これを御覽あつて、かうぞあそばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、波の花こそさかりなりけれ。

ふりにける岩のたえまよりおちくる水の音さへ、ゆるよしある所なり、緑羅の垣翠黛の山、繪にかくとも筆も及びがたし、女院の御庵室を御覽あるに、軒には鳶あさがほはひか、りしのおまじりの忘草、瓢箪しばしば空し、草顔淵が巷に滋し、藜藿深くとざせり、雨原憲が樞をうるほすともいひつべし、すぎのふきめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月に風さわぎ、世にたえぬ身のならひとて、うきふししげき竹柱、都の方の言づては、間遠にゆへるませ垣や、わづかにこと、ふものとは、峯に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら、青つゝらぐる人稀なる所なり、法皇人やあるく、とめされけれど、御いらへ申すものもなしや、ありて老い衰へたる尼一人まゐりた

り女院はいづくへ御幸なりけるぞと仰せければこの上の山へ花つみに入らせたまひて候ふと申す……や、あつて上の山より濃き墨染の衣きたりける尼二人岩のかけぢをつたひつ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇あれはいかなる者ぞと仰せければ老尼涙をおさへて花がたみ臂にかけ岩つ、じとりぐして持たせたまひて候ふは女院にてわたらせたまひ候ふつま木に微折り具して侍ふは鳥飼中納言維實の女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍の局と申しもあへず泣きけり。法皇御涙せきあへさせたまはず女院は世を厭ふ御習といひながら今か、る有様を見え參らせんすらん耻しさよ消えもうせばやとおぼしめせどもかひぞなき背々毎の閑伽の水むすぶ袂もしほるるに、曉おきの袖の上山路の露もしげくしてしほりやかかねさせたまひけん、山へも歸らせたまはず、また御庵室へも入らせおはしまさず呆れて立たせまし／＼たるところに、内侍の尼參りつ、花がたみをばたまはりけり。

承久の役に官軍敗れて、鎌倉幕府の基礎はいよく堅く、これより京都は獨立自由の思想を失ひ、萎靡して振はず。關東

鎌倉中世以後の非運

雜錄類

はもとより武事をのみ尙びて文筆に疎ければ、鎌倉幕府時代中世以後の文學は見るべきもの少し。散文には建長年間に出でたる十訓抄、古今著聞集、および時代定かならぬ宇治拾遺物語等のや、見るべきあるのみ。これらはいづれも平安朝の今昔物語等にならひて、古來のおもしろく珍らしき事實を輯めたるものにして、率直平易なる文體にてかきたり。

歌道の門閥

和歌の衰へたるも散文に同じ。人心は漸次萎縮せるに、藤原俊成、定家二代相續いて名手の譽ありしより、歌道の勢力はすべてその一門に歸し、歌集の勅撰も概ねその家に出づ。定家の孫(爲家の子)より二條、京極、冷泉の三家に別れて相反目せしが、京極は久しからずして絶え、他の二家門閥として樹立し、種々の法式を定めて子弟を束縛したれば、斯道は却つ

て日々に衰ふ。

二 南北朝

一九九四より二〇五二南北朝

一統の年まで五十九年のこと。

南北朝の概観

建武中興の業成り、幾ばくもなくまた壞れて、南北兩朝分争の世となりしが、政權は關東より畿内に復せり。輦下の縉紳は懶眠より覺めて、更に政事にあづかり、京吉野と相争へば、一般に活氣を生じたること、鎌倉幕府の世のはじめの如し。戦うて利なきは餘憤を文筆に漏らし、亂離の變にあひては、人生の險を説く。これ分争殆ど六十年の間、多く見るところなり。

頼阿と良基

當時、僧兼好、頼阿、淨辨、慶運を和歌の四天王と稱す。中にも頼阿二條家の教をうけて、名手の譽あり。その歌學を説きたる

兼好の徒然草

を井蛙抄といひ、己の歌を集めたるを草庵集といふ。關白二條良基また和歌に長じ、かねて連歌をよくす。連歌のことは次節にとくべし。かつて頼阿を招きて歌道を論じ、これを記録して愚問賢註といふ。

兼好は和歌よりもむしろ徒然草によりて後世に名を得たり。兼好もと吉田社京都の祠官より出で、後宇多上皇に仕へしが、上皇崩御の後出家して木曾に隠れ、また雙岡山に棲み、遂に年六十八にして伊賀に没す(二〇一〇)。徒然草はその隨筆にして、老佛の説を融化し、文章極めて暢達なり。世に枕草紙とこの書とを隨筆の双絶と稱す。

徒然草の一節

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは、雨にむかひて月をこひたれ、こめて春のゆくへしらぬも、なほ哀に情ふかし、さきぬべきほどの梢

ちりしほれたる庭などこそ見どころ多けれ歌の詞がきにも花見にま
かれりけるに早くちりすぎにければともさはることありてまからで
などもかけるは花をみてといへるに劣れることかは花のちり月の傾
くを慕ふ習はさることなれど殊にかたくなゝる人ぞこの枝かの枝ち
りにけり今は見所なしなどはいふめる……望月の隈なきを千里の外
まで眺めたるよりも曉近くなりて待ちいでたるがいと心深う青みた
るやうにて深き山の杉の梢にみえたる木の間の影うちしぐれたる群
雲がくれのほどまたなく哀なり椎柴白樫などのぬれたるやうなる葉
の上にかきらめきたるこそ身にしみて心あらん友もがなと都こひしう
おぼゆれすべて月花をばさのみ目にてみるものかは春の家をたちさ
らでも月の夜はねやのうちながらも思へるこそいとたのもしうをか
しけれよき人は偏にすけるさまにもみえず興するさまも等閑なり片
田舎の人こそよろづはもて興ずれ花のもとにはねちよりたちよりあ
からめもせずまもりて酒のみ連歌してはては大きな枝心なくをり
とりぬ泉には手足さしひたして雪にはおりたちて跡つけなどよろづ
のものよそながらみることなし。

親房等

准后北畠親房は南朝に仕へ、楠木、新田の諸將が戦死の後は

ひとり王事に勵みて、國家の柱石たり。親房軍旅の間にも筆
硯を捨てず、神皇正統記を著はして、古來の歴史をのへ、皇統
の正閏を論ず、文章平直にして議論正大なり。職原抄、元々集
等もその著なり。侍従吉房(剃髮して松翁といふ)もまた南朝
に仕へたる人、その見聞の事實をしるせるものを吉野拾遺
といふ。

太平記等

源平の争闘ありて源平盛衰記等の作ありき、南北の戦亂あ
りてこゝに太平記いでたり。太平記は小嶋法師のつくれる
ものにして、文體盛衰記よりいでて一層絢爛なるが、やゝ華
にすぎて實を失ふ嫌なきにしもあらず。

軍記類はなほ多けれども、その文のやゝ見るに足るものは、曾我物語、義經
記、軍記に擬したる鴉鷲合戦物語、魚鳥平家等なり。いづれも室町幕府時代
の作なるべく、盛衰記、太平記には及ぶべくもあらず。

三 謡曲と連歌

二〇五三より二一五〇頃後土御門天皇の朝まで殆ど百年ばかりの事を主とす。

室町時代の概観

室町幕府の世は、戦亂相繼ぎて殆ど寧日なしといへども、應仁の亂までは幕威なほ地に墜ちず、殊に將軍義満は勢強くして遊樂を好み、義政はその代に應仁の亂起りてまさに戰國亂離の世に入れりといへども、なほ文雅風流を好みたれば、繪畫、髹漆、陶磁、香茶の技などは非常の發達をなす。されば文學も新機軸をいたして人を驚かすものはなしといへども、なほ謡曲の如きや、見るべきものあり。

猿樂の能

猿樂の能は昔より神事に用ひたる技樂なり。義満これを好み、その技に長けたる結崎次郎清次(觀阿彌)を召して同朋とす。その子左衛門大夫元清(世阿彌)また同朋たり。二人從來の

謡曲

猿樂に田樂、曲舞等を折衷し、この舞に合せんがために新曲を作る。謡曲(俗にいふところの「うたひ」)これなり。かくてこの技は武家の式樂の如くなり、江戸幕府の世に至りてもなほ盛んなり。

狂言

謡曲はかの二人およびその弟子子孫等の作れるなりといへども、かれらはその譜節を定めたるにて、實は當時の僧侶などの手に成りしもの多かるべし。概ね佛教の思想に富み、また元の戯曲に出でたりとみゆるところも少からず。その趣向は、幽魂顯はれて往事を語り、高僧の回向によりて成佛すといふもの、過半を占めて、千篇一律の嫌あり。その文は古の詩歌の文句をとりて補綴したるところ多しといへども、流麗にして珠を轉ばずが如き好調あり。狂言はまた猿樂の能の餘興としてその間に挟み行はる。そ

の技滑稽を旨として、よく人の頤を解かしめ、しかも往々人世を諷するが如きところあり。その文は當時の言語をそのままに寫して、率直見るべし。

鉢木の節略 (謠曲)

常世のうく、旅人御宿參らせうのう。あまりの大雪に申すこともきこえぬげに候ふ。痛はしの御有様やなもとふる雪に道を忘れ、今ふる雪に行方を失ひ、一ところに佇みて袖なる雪をうち拂ひくしたまふ氣色、古歌の意に似たるぞや。駒とめて袖うち拂ふ陰もなし、佐野のわたりの雪の夕暮、かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたりに、これ東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひ疲れたまはんより、見苦しく候へど、一夜は泊りたまへや。げにこれも旅の宿、かりそめながら、値遇の縁、一樹の陰のやどりも、この世ならぬ契なり。それは雨の樹陰、これは雪の軒ふりて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらん……夜の更くるについで次第に寒くなり候ふ。何をがな火にたいてあて參らせ候ふべきや。思ひいだしたる事の候ふ鉢の木をもちて候ふ。これを切り、火にたいてあて申し候ふべし。時細げにくく、鉢の木の候ふよ。常世さん候ふ。某

世にありし時は、鉢の木にすぎ、數多木を集めもちて候ひしを、かやうの體に罷りなり、いやく木すきも無用と存じ、みな人に參らせて候ふ。さりながら、今も梅櫻松をもちて候ふ。あの雪もちたる木にて候ふ。某が秘藏にて候へども、今夜の御もてなしに、これを火にたきあて申さうするにて候ふ。時頼いやく、これは思ひもよらぬ事にて候ふ。御志はありがたう候へども、自然またお事世にいでたまはん時に、御慰にて候ふ間、なかなか思ひよらず候ふ。常世いやとて、この身は埋木の、花さく世にあはんこと、今この身にてはあひがたし。常世の妻、唯徒らなる鉢の木を、御身の爲にたくならば、常世これぞまことに難行の、法の薪とおぼしめせ。妻しかもこのほど雪ふりて、常世仙人に事へし、雪山の薪、妻かくこそあらめ。常世われも身をすて人の爲の鉢の木、きるとてもよしやをしからじと、雪うち拂ひて、みれば面白や、いかにせん。まつ冬木よりさき、そむる窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづ先だてば、梅をきりやそむべき。見じといふ人こそ、うけれ山里の、をりかけ垣の梅を、だに情なしとをしみに、今更新になすべしと、かねて思ひきや。櫻をみれば、春毎に、花少し遅ければ、この木やわぶると、心をつくし育てしに、今はわれのみわびて住む家、櫻さきりくべて、ひ櫻になすぞ、悲しき。さて松はさしもげ

に枝をたぬ葉をすかして、かゝりあれと植るおさし。そのかひ今はあら
しふく、松はもとより煙にて、薪となるもことわりや、さきりくべて今ぞみ
垣守、衛士のたく火はお爲なり、よくよりてあたりたまへや……
常世いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふは實か、何おびたし
く上る、さぞあるらん、東八箇國の大名小名、おもひくゝの鎌倉入、さぞ見
事にて候ふらん、白金物うつたる絲毛の具足に、金銀をのべたる太刀か
たな、かひにかうたる馬にのり、乗替中間さらびやかに、うちつれくゝ上
る中に、常世が常にかはりたる、馬物の具や打物の物、その物にあらざる
氣色、さぞ笑ふらん、さりながら所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇
めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道おそや、急げども弱きに弱き柳の絲
の、よれによれたる瘦馬なれば、うてどもあふれども、さきへは進まぬ足
弱車の乗力なれば、追ひかけたり……時程やあいか、あれなるは
佐野源左衛門尉常世か、これこそいつぞやの大雪山に宿かりし修行者よ、
見忘れてあるかい、で汝佐野にて申せしよな、今にてもあれ鎌倉に御大
事あるならば、ちぎれたりともその具足とつて投げかけ、さびたりとも
その薙刀をもち、やせたりともあの馬にのり、一番に馳せ参すべきよし
申しつる、詞の末を違へずして、参りたるこそ神妙なれ。

歌道の衰微

秘事傳授

連歌

歌集の勅撰は、新古今集よりのち後花園天皇の朝の新續古
今集まで十三回あり、古今集以下これらを併せて廿一代集
といふ、これより後は勅撰も行はれず、二條冷泉家も門閥を
以て誇れども、微々として振はず、こゝに將軍義政の頃、東下
野守常縁といふ武士、文學に秘事傳授といふことを始めて、
殊に古今傳授を重しとし、これを飯尾宗祇に傳ふ、その傳授
といふこと、何のいはれもなき事のみにて、今日よりみれば
噴飯の外はあらず、かくの如きことにて、その道を束縛せし
かば、さらでだに衰へし和歌はいよく衰へゆきたり。
この頃和歌に代りて大に行はれたるは連歌なり、連歌と
は短歌一首の半を一人がよめば、他の一人がこれに繼いで、
その半をよむものにて、もと一種の遊技に過ぎず、その起源
は太古にありき、後鳥羽天皇の頃よりはわけて和歌の餘興

としてこれをもてはやし、一首のよみきりに止まらず、首尾相繼いで二十韻以上千句にも及びき。南北朝に二條良基これを好みて、その式を定め、また勅撰に准じ、古今の連歌を集めて菟玖波集を撰びき。これより連歌はますます盛んに、飯尾宗祇の頃に至りて絶頂に達す。宗祇(種玉庵)は應仁頃の人、勅を奉じて新撰筑波集を撰ぶ。海内風靡し、仰いで斯道の宗とす。門人には柴屋軒宗長、牡丹花宵柏最も名あり。

宗祇

宗祇若き時猪苗代兼載に連歌の道を問ふ。兼載曰く、惜いかな、十年歳たけたり、連歌を學ぶには廿年の練磨を要す。宗祇曰く、しからは十年晝夜脚まば如何と、それより研鑽怠らず、遂に大名をなす。宗祇また旅行を好み、四方に流浪して定居なし。年八十二にして旅中に歿す(二一六二)。

水無瀬三吟百韻のうち (連歌)

雪ながら山もとかすむゆふべかな。
ゆく水とほく梅にはふ里。

宗祇
宵柏

兼良等

河風にひとむら柳春みえて、
舟さす音もしるきあけがた。
月やなほさきりわたる夜に残るらん。
霜おく野はら秋はくれけり。

宗長
宵柏
宗長

室町幕府の世にありて最も文事に長けたるは一條禪問兼良なり。後花園天皇の朝兼良關白となり、三宮に准せらる。應仁の亂を避けて奈良に移り、また美濃に遊ぶ。博聞強記にして老年に至るまで述作して倦まず。公事根源を著はして年中行事の起源を述べ、將軍義政のために文明一統誌、義政夫人のために小夜の寐覺將軍義尙のために樵談治要を作る。その文平易にしてしかも味あり。年八十にして薨す(二一四二)。武人には義滿の頃、今川貞世(入道了俊)文事に通じ、兼良と同時に大田持資(入道道灌)和歌をよくす。東福寺の僧正徹も貞世等に學びて和歌をよくせり。

四 文學極表

二一五一頃より二二六二(家康將軍となる前年)まで百十餘年間、即ちいはゆる戰國の世のこと。

時勢の衰頹

鎌倉室町幕府の世を通じて、概するに和歌は京都公卿の間

に弄ばれ、その他の文學は僧侶のたづさはるもの多かりしが、この傾向は戰國の世に至りてますます著しくなりぬ。應仁以來、戰亂相繼ぎ、皇室は窮乏の極に達して、節會大禮も行はず、宮垣壞れて遙かに禁中の燈を望むべく、供御足らずして畏くも宸筆を錢に替へたまふ。幕府の威全く地に墜ち、諸侯はその領地に割據して奪略を事とし、京都は修羅の巷となりてたゞ荒れに荒るれば、貴賤ともに四方に離散す。されば細川氏、三好氏の堺に、大内氏の山口に、北條氏の小田原に居りて勢を振ふや、文筆藝術に長けたるものは、一時遁れてこれらの地に住めることもありき。

金澤文庫と足利學校

世のさまかくの如くなれば、學校教育も衰微の極に達す。沂りて考ふるに、平安朝の衰ふると共に大學、國學も衰へ、鎌倉幕府の世には始と滅亡のさまにて、當時唯一の學校ともいふべきは金澤文庫のみなりき。文庫は花園

文學の萎縮

天皇の朝（一九七六）北條顯時が金澤武の稱名寺に建てたるものにして、その子貞顯ついでこれを掌り、群書を集めて、一族の子弟をはじめて學問に志あるものをして來り學ばしむ。北條氏亡びて文庫も衰へたるを、前期に上杉憲實これを再修したりしが、戰國の世に至りてはまた衰へたり。かくてこの時代に學校といふべきは足利學校あるのみ。足利學校は下野國足利にあり、けだし國學の遺制なりけんを、南北朝の頃、足利基氏これを興し、前期に（二〇九九）上杉憲實これを再建し、それより歴世禪僧これが學頭となり、戰國の世には海内唯一の學校として、以て江戸幕府の世に及びり。

されば和歌國文の衰へたることはいふまでもなく、縉紳にては三條西内大臣實隆及びその子公條、その孫實枝等がわづかに古今傳授を傳へ、源氏物語を注釋したるなどの事あるに過ぎず。連歌はさすがに無智のものも作ることを得れば、相繼いで盛んに行はれ、武人が戰場消閑の技にさへ用ひられたり。

五山の僧徒

鎌倉幕府創立以來、武家は文事に疎ければ、その祐筆となり、參謀となれるもの僧侶に多し。わけて禪宗の盛んに行はれてより、支那僧の歸化するあり、わが僧の渡航するありて、宋元の文化はかれらの手によりて傳來す。南北朝の義堂、絶海など最も詩文に名ありき。かくて戰國の世に及びては、漢文學もいよく衰へ、當時博學と稱せられたる公卿の、四書は讀めども五經は知らず、その他は推して知るべし。これら之間にありてわづかにその命脈を保てるは禪僧にして、殊に京都の五山は文學の淵叢たり。

平民文學の曙光

この時代はかくの如く文學衰微を極めたる世なれども、貴賤の階級の壞れたればにや、貴族文學の衰へたるに反して、無學の人も解すべき平民文學の曙光はこの時に現はれた。り。文正草紙、鉢かづき、草紙等、これを總稱して御伽草紙とい

ひ、童蒙の訓誨に資すべき小説の類なり。これらは前期より江戸幕府の世のはじめまでのうち、殊にこの時代に出來たるが多かるべし。淨瑠璃といふも、源はこの時代にあり。山崎宗鑑、荒木田守武が好んで連歌の俳諧體を詠じ、卑俗滑稽を旨とせるは、即ちこの後盛んなるべき俳諧のおこりなり。連歌の半を割き、十七字句を一首として詠ずることも、この時代に始まれり。

第四章 江戸幕府の世

一 文學復興

二二六三より二三二〇頃後西院天皇の朝まで殆ど六十年間、即ち寛永の前後、三代將軍家光の頃のこと。

徳川家康國內を一統して、戰亂久しく相續きし世もこゝに太平に歸し、四民はじめて堵に安んず。家康性極めて慎密、馬

文學復興の氣運

上に天下を取れりといへども、馬上にこれを治むべからざるを知り、大いに文學の振興に務む。命じて散亂せる書籍を集め、必要なるは活字を製りて板行す。世既に靜謐に、またこの獎勵あり、寛永の頃に至りては、衰廢せし文學も漸く復興の運に向ふ。

惺窩と羅山

文學復興の魁をなししは漢文學にして、藤原惺窩、林羅山主としてこの復興に功あり。惺窩(名は肅)はじめ佛門に入りて妙壽院といひ、才名五山の間、高かりしが、志専ら儒學にありて、遂に緇流を脱す。家康の京都にあるや、しばく延いて經史を講せしむ、されど多くは辭して出でず。門人に俊逸の士少からざるが中に、羅山殊に名あり。羅山(名は信勝、薤髮して道春といふ)は家康の聘に應じて江戸に來り、律令制度の改定に參與し、年七十五にして歿す(二三一七)。これより子孫

代々儒學を以て幕府に仕ふ。この二人が奉ぜしは宋の朱熹の學なり。朱學は既に南北朝の頃よりわが國に傳はりしが、惺窩、羅山等の出づるに及びて、大に行はるゝに至れり。

その他の儒者

中江藤樹、山崎闇齋等も當時の有名なる學者なり。藤樹(名は原は近江の人)出で、伊豫の大洲侯に仕へしが、その母の郷里にあるを以て職を辭す。許されず、よりて逃れて郷に歸る。その學は明の王陽明の説を奉じて、實踐躬行を主とし、好んで孝經を講ず。近里の人その徳に服してみな善に移る。世に藤樹を近江聖人と稱す。熊澤蕃山(名は伯繼)その門より出で、備前侯に仕へて治績あり。野中兼山(名は良繼)は土佐の人、朱學を奉じ、國侯に仕へてまた治績あり。山崎闇齋(名は嘉は京の人、兼山を師友として起る。闇齋はじめ朱學を唱へしが、のち一種の神道を唱へ、號をも垂加と改む。門人頗る多く、一時天下を風靡せり。

幽齋等

この時代のはじめに和歌をよくせしは細川幽齋、木下勝俊等なり。幽齋(名は藤孝)は武人にして諸藝に通じ、古今傳授をうけて大いに世に重んぜらる。この傳授を幽齋にうけしも

貞徳の古風

の、公卿に烏丸光廣、地下に松永貞徳等あり。貞徳長頭丸と號すは京の人、和歌國文に通ず。かねて俳諧をよくし、御傘を著はしてその法式を定む。年八十三にして歿す(二三一一三)。門人に野々口立圃、松江重頼、安原貞室、北村季吟等あり。江戸幕府の世に俳諧の盛んなるは、實に貞徳より興れりといふべく、連歌はこれがために勢を失ふ。されどその作なほ幼稚なるもの多し。世にこの一派を古風と稱す。

しをる、は何かあんずの花の色。

雪月花一度に見する卯月かな。

これはくとはばかり、花の吉野山。

まざくといいますがごとし、魂祭。

貞徳

同

貞室

季吟

當時の文學の種類

概するにこの時代は文學復興の運に向へりといふまでに、いまだ斬新なる著作の春花秋葉とさきにはふには至らず。新作の書も多くは訓蒙諺解の類なり。小説の類も假名草

佛教と儒道

紙といひて、御伽草紙よりわづかに一步を進めたるもの、いづれも婦幼に儒佛の主義を解せしめやすくしるしたるが多し。これらの作者には鈴木正三、淺井了意等あり。文學の復興せるや、漢文學まづ勢を得て、この後もますます發達す。しかるに佛教には、寺院に領地あり、擅越あり、僧侶は富有なるまゝに安逸を貪りて、布教に熱心なるもの稀なり。されば前代までは文學に佛教の影響最も多かりしが、この期を界として、次期よりは儒道の感化の、佛教よりも漸次多くなりゆくを見る。

二 元祿前後の盛運

二三二一頃より二四〇〇頃(櫻町天皇の朝)まで

八十年ばかり、即ち五代將軍綱吉の前後のこと。

文藝の革新

太平年久しく、四民既に慘澹たりし父祖の世を忘れて、食に

飽き衣は暖かに、安穩なる生活を送れば、更に新たなる文藝の行はれんことを望むや切なり。この需要に應じて種々の文學盛んに興り、こゝにはゆる元祿時代の盛運は成れるなり。

儒學の勃興

將軍綱吉漢學を好み、しばしば儒者を集めて經義を討論せしめ、またみづから經書を講ず。上の好むところ下これに靡くならひ、諸侯も争うて儒者を聘す。こゝに於て漢學頗る熾んに、學者一時に輩出す。林家には羅山の孫鳳岡(名は信篤)幕府に信任せらる。木下順庵(名は貞幹)の學は博通不偏を主とす。順庵は京の人、のち江戸に出づ。門下に博學奇才の士多く、雨森芳洲、新井白石、室鳩巢、祇園南海等ことに名あり。伊藤仁齋(名は維楨)京に起り、朱學は孔孟の古意にあらずとしてこれを斥け、別に古學を立つ。その子東涯(名は長胤)博覽にして

よく父の學を祖述す。荻生徂徠(字は茂卿)江戸にあり、また朱學を駁し、六經を重んじて、古文辭學を立て、仁齋父子と對峙す。その門人に太宰春臺は道義に通じ、服部南郭は詩文をよくす。

益軒と白石

貝原益軒(名は篤信)は筑前福岡侯の臣にして、また當時の碩學なり。中年京に學を講ず、その門に遊ぶもの多し。益軒性謙讓にして博識を衒はず、著書いづれも平易にして實益あらんことを期し、文訓、武訓、樂訓、童子訓等の著の如きは、普通文にてしるして丁寧懇切なり。新井白石(名は君美)は江戸の人、將軍家宣家繼に仕へて、政務に參與す。和漢の典故に通じて、學問博く識見高し。わが國の歴史語學等に關しても有益の著多く、古史通、讀史餘論、同文通考、東雅等、一々數ふるに暇あらず。中にも藩翰譜をりたく柴の記は、普通文の模範となすべし。年六十九にして歿す(二三八五)。室鳩巢の駿臺雜話、太宰春臺の獨語等もまた普通文の上乗なるものなり。

光圀の水戸學

水戸侯徳川光圀(名は最も)和漢の文學に功あり。光圀は家康の孫なり。明の遺臣朱之瑜(舜水と號す)を聘して學を講ぜしめ、ま

た修史の志篤く、彰考館を開き、儒臣をこゝに集めて大日本史を撰せしむ。釋萬葉集、扶桑拾葉集、禮儀類典等も光圀が臣下を督して編せしめしものなり。光圀年七十三にして薨す(二三六〇)。その學の重んずるところは、専ら國を愛し名分を正すにあり。後世、勤王攘夷の説の勃興せしも、水戸家の學問與つて大いに力あるべし。

國文學の革新

國文學の面目を一新せしことは、漢文學にも超へたり。北村季吟(拾穂軒と號す)京にありて松永貞徳に學ぶ。源氏物語湖月抄、枕草紙、春曙抄等著はすところ、古文の註釋多し、いづれも懇切を旨として世人に益ありといへども、從來の學風を保守してその外に出でず。のち幕府の聘に應じて江戸に下り、歌學所となる。子孫代々その職を繼ぐ。季吟の舊派に對して新派の旗を翻せしもの、江戸に戸田茂睡あり、大阪に下河

長流と契沖

邊長流、釋契沖あり。茂睡は梨本集を著はして和歌の積弊を論ぜし功あるのみ。長流の國文和歌を講ずるや、中古以來の僻説を捨て、先人未發の説を述ぶ。光圀の依托によりて萬葉集の註釋を企てしが、性怠慢にして業を卒へずして歿す。契沖(その居を圓珠庵と號す)は眞言宗の僧にして、長流と親し。佛經を學ぶ傍、國文を好み、造詣きはめて深く、識見世に絶す。その著書少からざるが中に、學界に大影響を與へしは萬葉集代匠記と和字正濫抄となり。代匠記は長流歿してのち光圀の囑に應じて作りしもの、平安朝以來濃霧の中に隠れたりし奈良朝文學は、こゝにはじめて明瞭なるに至れり。和字正濫抄は中古以來假名遣の誤まれるを正せるものなり。かくて契沖は實に近世の國文學を開きしものといふべし。年六十二にして寂す(二三六一)。

春滿の國學

や、下りて享保の頃、京の稻荷神社の祠官に荷田春滿あり。深く國史律令に通じ、從來のわが國書を説くもの、佛敎或は儒道の意を附會せるを非とし、本來の古意を闡明するを以て己が任とす。いはゆる國學として皇國の道義を説くは、この人に起れるなり。

宗因の談林風

學問の方面における文學の發達は凡そかくの如くなるが、純文學の進歩は更に驚くべし。俳諧には、寛文の頃、西山宗因、梅翁と號す。大阪に居り、古風よりいでて漢語を用ひ、字あまりを好み、佻儷なる調をなす。三都ともに門人多く、一時天下に鳴る。この流を談林風と稱す。松尾桃青芭蕉と號すは伊賀の人、京に出でて俳諧を北村季吟に學び、のち江戸に出で、また東西に周遊して吟腸を養ひ、遂に正風を起す。その風、幽玄温籍にして、天地の祕を發くにあり。年五十一にして大阪に

桃青の正風

歿す(二三五四)四方みなこれに靡き。門人に俊秀の士多し。榎本其角は江戸にありて江戸座を起し、服部嵐雪も江戸に住みて雪中庵と稱す。森川許六は彦根に、向井去來は京に居り、東花坊支考は美濃風、岩田涼菟は伊勢風を開く。かくて俳諧は都鄙上下に遍く行はるゝに至れり。

俳諧に附合と發句とあり。附合は連歌にひとしく、二句を集めて卅一字歌一首とし、前の句は次の句に接せしめ、次の句はまたその次の句に接せしめ、かくて珠を繋げる如くに連ねたるものなり。發句は十七字句を完全なる一首と見たるものなり。はじめは附合を主とせしが、その法や、困難なるを以て漸く衰へ、後には發句のかた盛んに行はる。次には發句の例のみをいだす。

古歌にいはく、ちとせぞみゆる鏡餅。

宗因

世の中や、蝶々とまれかくもあれ。

同

白露や、無分別なるおきどころ。

同

古池や、蛙とびこむ水のおと。

桃青

花の雲、鏡は上野か、淺草か。
 荒海や、佐渡によこたふ天の河。
 枯枝に鳥のとまりけり、秋のくれ。
 いなづまや、きのふは東、けふは西。
 聲かれて、猿の齒しろし、峯の月。
 梅一輪、一輪ほどのあた、かさ。
 黄菊白菊、そのほかの名はなくもがな。

同 同 同 同
 同 其角
 同 嵐雪
 同

西鶴の浮世草紙

小説も、貞享元祿の頃、井原西鶴のいでしより、假名草紙の幼稚なりしを轉じて、細かに風俗を寫し、人情を穿つに至る。これを浮世草紙と稱す。西鶴は大阪の人、宗因に學んで俳諧をよくせしが、その才はこれに満足せず、進んで筆を小説に染む。その筆輕妙にして、法格に拘はらず、寫すところ多くは短篇を集めたるものなり。好色一代男、好色五人女、櫻陰比事、世間胸算用等なほ多し。ついで享保の頃、京の書肆に八文字屋

八文字屋本

門左衛門等の戲曲

自笑あり、江嶋其碩と力を合せ、西鶴にならひて小説を作りて、世態人情を寫すを主とす。これを八文字屋本と稱して、傾城禁短氣、傾城曲、三味線、浮世親仁形氣等その數多く、一時大いに世に行はる。小説に伴ひて戲曲も長足の進歩をなす。これよりさき既に淨瑠璃は行はれしが、なほ拙劣なるものなりき。元祿の頃、近松門左衛門(巢林子と號す)あり、はじめ京にありしが、大阪に下りて淨瑠璃大夫竹本義大夫のため、戲曲を作る。才藻湧くが如く、筆路の自在なること行雲流水に似たり。その作國性爺合戰、曾我會稽山等の時代物、曾根崎心中、心中天網嶋等の世話物、併せて百種に餘れり。年七十二にして歿す(二三八四)。ついで竹田出雲あり、三好松洛、並木千柳等と共に假名手本忠臣藏、菅原傳授手習鑑、義經千本櫻等を作る。いづれも世

人の喝采を博して今に大い行はる。

工藤祐經、曾我兄弟の對面（曾我會稽山第三段のうち）
 ひつたてんとする所に、五郎時宗何としてか見つけ、ん坂を下りに駈
 け來り、列卒の兵五六人、ひつつかんで手鞠の如くうちつけく。團三郎
 が粗も皮もひきちぎり、八幡四郎をはたと蹴倒し、どうとふまへ、梢もゆ
 るぐ大音にて、鹿の皮かづきし、人を鹿と見るは、おろかの眼力、曾我五郎
 時宗は形は人にて、魂の鹿をよつく見る、鹿こそ通れ、十郎殿おりあひた
 まへとよばはれば、祐成續いて走りつき、兄弟揃うて珍しき對面と、太刀
 の柄に手をかくれば、祐經が郎黨主をうたすな、除すなと、二重三重にか
 けへだて、ひつつ、んで、たち騒ぐ。團三郎割つて入り、ア、／＼旦那、危
 なされな、今日のお命團三郎が預かる、御一生の大事の御使、古郷の御老
 母、一昨日の夕暮より、俄の御病氣次第に重り、唯今も測られず、千に一も
 御本腹あるまじき御覺悟、今生の名殘兄弟に、一目對面せん、萬事をふり
 すて、たち歸れ、これに背かば、時宗は元の如く、十郎もろとも、生々世々の
 勘當と、たえく、弱る御聲を聞きすて、駈けつけしと、聞くよりはつと
 力も落ち、兄弟目と目を見合せて、寝ぬに夢みるこゝちなり、ア、御思案

どころでなし、京の小四郎の不所存人さへ、ひつ添うて看病、この人にお
 二人が孝行劣りたまひては、冥途までの御恨、天の冥加も恐ろし、祐經
 殿に和を乞うて、おたちく、と勸むれば、祐經大きに力を得、これく、兄
 弟、父の河津は流矢にあたりしとも、俣野、五郎が討ちたりとも、分明なら
 ぬ親の敵、さしあて、祐經をねらふとなよし、さもしげにいひわけ
 は、すまじいぞ、サアうちかけよ、きりかけよ、音にきく程にもなし、怯れた
 か、曾我殿原と足もと見たる、廣言、五郎たまらず、神妙候ふ、祐經と踊りい
 づるをおしと、め、母の便を何と、きく、狂亂か、弟、いやく、微塵こば
 いになればとて、敵に聲をかけられず、こく、たつては、骸の耻辱、放され
 よ、十郎殿、ヤイ身の譽も耻もすて、娑婆と冥土の父母を喜ばせ奉らんと、
 幼少より今日まで、兄弟が念願は、や忘れしか、時宗、ハッア、そうちや、エ、
 殘念至極、くちをしい、祐成殿、無念な、時宗、あさましき曾我の運命や、と涙
 の齒ざり身をふるはし、握りひしぐ、太刀の柄、ぬきかけく、はつし、
 と、鑄打は、鑷切、羽も一時に、碎けちるべう、見えてけり、……母のいたは
 り心ならず、參會は重ねて、と立たとすれば、暫く、孝行のほど、感じ
 いる、祐經も一家の端外のやうには、思はず、本海道は、遠ければ、山路の近
 道急ぎのため、某が秘藏の名馬、狩場まで、引かせしを、兄弟に、餞別せん、外

道鶴毛、婆羅門栗毛、これへく、あつと答へて引きいだす。その長八寸あまり、肉十分、節高く、沛艾に口こはく、乗入もせぬ野鬚の馬、一様の鞍皆具、道繩、追繩、口取繩、つらを振れば、六人の舍人もよろめきひつたてられ、前脚かいて齒をた、き人を嚇して鼻嵐鬣よりもる、眼の光角なき鬼の如くなり、兄弟きつと目くはせし、必定この馬に駈け落させ、殺すか、不具が耻か、せん謀、辭退せばなほ耻辱と……ひるむところを引きよせ、ひらりとうちのつて、兄弟笠ふんばつて、衝を並べひかゆれば、祐經案に相違して、唯うつかりと大口をあきれば、ぞ見えにける、祐成勇めば時宗きはひ、ヤア、團三郎、汝はこれより秩父殿、和田殿、そのほかの方々へ一禮申して、假屋をしまへ、サア來い、五郎、いざござれ、十郎殿と一鞭くれてのり出すも、日脚も速き午未、わが身の運も上刻と、八卦うらかた八響く、鐘にさそはれ、風さそふ、朽木の櫻春すぎで、また何時の世の花をだに、待つにかひなき會、我の里いたはしや、母上は、河津に別れしゆふべより、二十餘年の物おもひ、貧しき上に世をしのぶ、兄弟の子の成人を、急ぐは親の老と死を、急ぐと知らで身につもる、雪をれ松のむすをれに、俄病の萬死の床、たのしみは似ぬ、孫晨が、藁屋の紙帳もりぐる風、そよと寝がへり息つきも、今を限ときこえけり。

文學における大阪

當時の文學の特性

この時代には文學上京阪のかた江戸より重きをなし、殊に戯曲小説にては、大阪がその焦點たりしことを忘るべからず。この地や、西國往來の要津にして、商業の最も繁昌せる處、豊臣秀吉がこゝに城廓を築きしより、この時代に至りてますます盛んになり、遂に種々の文學をも生じたるなり、また當時の風俗遊蕩奢侈に流れ、人情浮華淫靡に趁れば、文學もおのづから輕佻卑俗の調を帯びたるは、その頃の戯曲小説を繙かば一見して知らるべし。

三 文運東遷

二四〇一頃より二四五〇頃(光格天皇の朝)まで五十年ばかり、即ち寶曆の前後、將軍家重家治の頃のこと。

幕府の創立と共に政權は江戸に移りしが、人文の發達は直ちにこれに伴はず、江戸にも著名の文學者はありしかど、な

文學中樞の移動

在滿と眞淵

ほ少数にして、概するに前代までは、文學の中心は京阪にありき。しかるにこの時代は形勢漸く動いて、正に文運東遷の期なりといふべく、寛政以後に及びては、榮枯處をかへ、京阪は全く江戸に及ばざるに至れり。
文運東遷の媒となりしは、荷田在滿、賀茂眞淵を主とす。在滿は春滿の甥にして、最も制度の學に委しかりしが、江戸に下りて家學を弘む。當時、田安侯、徳川宗武(吉宗の子)國學を好みて、學者を聘す。在滿これに仕へ、國歌八論を奉りて、從來の歌道の弊を論ず。されどその説宗武と合はず、辭して眞淵を以て代らしむ。賀茂眞淵(家號を縣居といふ)は遠江の人、京に出て、春滿に學び、學成りてのち江戸に來りて講説し、また宗武に仕へて厚遇せらる。その學は春滿に繼いで、わが道固有の道を明かにするにあり。謂へらく、むかし儒佛の教の傳は

蘆庵等

りしより、古道はこれがために廢れぬ。故に古道を明めんとせば、外國の影響なく、人意の自然に出でし古書を究めざるべからず。その古書は萬葉集最も善しと。よりに深くこの書を究めて、みづから歌文を作るにも、また奈良朝以前にならふ著はすところ、萬葉考、冠辭考、祝詞考、國意考、歌意考、賀茂翁家集等あり。年七十三にして歿す(二四二九)門下に高才の士多く、この一派の勢天下を席卷す。
されど、なほ京都には歌人に小澤蘆庵あり、眞淵と異にして、平語を用ひて清新の調をなす。その家集に六帖詠草、同拾遺あり。伴蒿蹊(また閑田子と號す)もまた歌文に巧に、富士谷成章(北邊と號す)は文法に通ず。成章の子に御杖あり。上田秋成(餘齋)は京阪の間に放浪して、一生を不平のうち終る。著はすところ、雨月物語、崩癖談、藤篋册子等あり。

萬葉新採百首解序

真淵

いにしへの歌は天地のなしのまに／＼なる海山の如ししかありてあらたまの月日と共に移りゆく雲風花紅葉につけていひいでつれば今にありてもその時を見るが如く、まことありてめづらかになんおぼえける。中つ頃の歌は猶そのおのづからの海山の如くなんあるが中に驚のかゝなく山のおく、鱒のいかれる海のそこひなどをばおきて、眉のごとにほひやかに鏡なすたひらかなるさまをいひいでつれば、みやびたることのきはみなりけり。後の世の歌はそのまことある心は忘れゆきて、たゞこのみやびかならんをのみ願ひ、かつおのがじ、細かなる巧をそへもてきぬれば、高山は短山となり、大海は小池にうつりて、終には庭のおもに造れる如くなんなりにける。おほよそ物の移ろひゆくわざも一たび二たびなどこそあらめ、あまた度となりては、いと異ざまにならずやはある、たとへば富士の嶺を思ひて比叡の山を望み、鹽竈をこひて近江の湖に向ふ如きは、さてもありなんをその比叡も近江もまたく移りて、程なき庭に造りたらんはいかで狭く苦しからざらむ、されど道遠き境を思はんには、うつしもしつべきを、移ろひく／＼ての世となりては、富士の山、鹽竈の浦などに近く住まん人、さる海山は常あるさまぞと

て短山小池などの形を家の庭に造りてめづるがあまりに、年月経てたちもいでねば、近くさる海山あることをも忘れて、人のいざなへども、わが庭にはしかじとのみいひをらんが如くなんなりにける。しかるを今かく所せくなりては、その本に歸りつべきものとよき人のいひいづるを聞きて、ある人試に程なき門をいでて、雪の朝月の夕ごとに、思ふどち駒なめ舟ぎほひしつ、見て、かの所せく拙かりしことをはじめて、覚えぬとなんいひける。かくいにしへの學は葦垣の間近くのみあるを、かさわけて見ぬ人こそあやしけれ。故やつがりの心をいはまくするほどに、やむごとなき仰言をさへうけたまはれば、かの海山なすおのづからなる百の歌を、萬の言の葉てふ書よりつみいでて、峯の雲あがれる世の心をむかへ、濱千鳥跡あることをかうがへてしるすになん。

富士山をよめる長歌一首およびその反歌

同

磯間よりそがひに見ゆる、駿河の海沖つ波路はせばきかも、ふりさけみれば相摸嶺の、八重山峯は低きかも、天の原なる富士の嶺の麓をいでて、風のまに横ほる雲に、駿河の海沖もかくろひ、相摸嶺の峯も雨ふり、時のまに雷もなりゆけど、六月のてる日の空にあらはれて、曇るともなく、常に雪ぞふりける、富士の高嶺は、

駿河なる富士の高嶺はいかつちの音する雲の上にくそ見れ
富士の嶺の麓をいでてゆく雲は足柄山の峯にかゝれり。

當時の短歌の例

信濃なるすがの荒野にとぶ鷲の翅もたわにふく嵐かな。 同
大堰川月と花との朧夜にひとりかすまぬ浪のおとかな。 蘆庵
賤の女が門の乾瓜とりいれよ風ゆふだちて雨こぼれきぬ。 同
霧わけてわがのる駒のたつ髪に月こそやどれ露やおくらん。 同

蕪村也有等

俳諧は都鄙ともに遍く行はれしが、その範圍の廣くなるに
隨ひて、また卑俗に流る。天明の頃江戸に大嶋蓼太、京に谷口
蕪村等ありて、更に頽勢を挽回す。横井也有は尾張侯の重臣
にして、殊に俳文をよくし、淡雅輕妙、人を喜ばす。その文を集
めしものに鶉衣等あり、かくて次期に及びて、俳諧はますます
す廣く行はれしが、まことの技倆ある人少く、斯道は漸次俗
了しゆくのみ。

江戸の小説類

五月雨や、ある夜ひそかに松の月。
春の海、ひねもすのたりくかな。
ほととぎす、平安城をすぢかひに。
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな。
蕭條として石に日のいる枯野かな。

蓼太
蕪村
同
同
同

戯曲小説は、この時代に京阪の間にもその作なきにあらず
といへども、見るべきもの少く、次期に及びてはますます衰
ふしかるに江戸にては青木といふ小説この頃漸く發達し、
兒童の玩具より進んで世態人情を穿つに至る。その著者に
明誠堂喜三二、戀川春町、芝全交等あり。當時また江戸に建部
凌岱、平賀鳩溪あり。凌岱(名は綾足)は國文に通じ、古體の文に
て西山物語、本朝水滸傳等の小説を著はす。鳩溪(また福内鬼
外、風來山人の號あり)は奇才を抱いて世に容れられず、戯曲
戯文を綴りて悶を遣る。

四 寛政以來の盛運

二四五頃より二五二七明治維新の前年まで殆ど八十年間即ち文化文政の前後十一代將軍家齊の頃の事

樂翁

この時代の文學の保護者は松平越中守定信なり。定信は田安宗武の第七子にして、いでて奥州白河の城主となる。天明七年(二四四七)老中となり、いはゆる寛政の改革を行ひしが、六年にして致仕して樂翁と號し、文學を樂みて晩年を送る。その隨筆に花月草紙等あり、輯むるところ集古十種、輿車圖考等あり。

當時の儒學

この頃まで湯嶋戸江の大成殿は林家の私學なりき。定信これを幕府の有として昌平校と稱し、林衡(述齋と號す)をしてこれを統へしめ、柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲をして助けしむ。そののち昌平校に教授せしもの、最も有名なるは佐藤一

東西形勢の差異

齋安井息軒、鹽谷岩蔭等なり。さきに古學、古文辭學の起りてよりのち、井上金蛾、山本北山、太田錦城等折衷學を唱へ、黨を分ちて相争ひ、篤學の風日に廢れしかば、定信これを患ひ、朱學を奉ぜざるものは官職に就くことを得ざらしむ、これを異學の禁といふ。その頃、大阪には中井養庵の子竹山、履軒また朱學を奉じ、父について懷徳書院に子弟を教授せり。そもくこの時代には邊海に事あり、ひいて尊王攘夷の論も起り、嘉永以後は人心安からざるに至れりといへども、寛政より文化文政の頃までは、いはゆる大御所様時代の、江戸の繁華の絶頂に達したる時にして、恰も元祿前後の京阪の如く、都人は太平の化に浴して擊壤鼓腹すしかるに、京都は江戸の興隆に反比して衰微に向ふ。皇室は幕府に壓せられて、攝關清華の家も貧しくすごせるに、國學の開けて上古の

東西文學の相違

状態を知るにつけても、今の不運を慷慨せざるを得ず。この形勢の相違はさながら文學に影響せり。かゝれば江戸の文學は、安逸に甘んじて太平を謳歌し、不平の念の見ゆること稀なるに、關西は鬱勃の懷、禁じがたく、文學も尊王愛國の主義を鼓吹する具となりぬ。漢文には江戸に龜田鵬齋、大窪詩佛、菊池五山等あり、狂歌に巧なる蜀山人、畫人の谷文晁等と共に書畫會を開いて、財を聚め酒に浸る。京都には梁川星巖、頼山陽等詩文をよくして、また勤王の義に厚し。

星巖と山陽

梁川星巖名は孟緯は美濃の人、江戸に出で學びのち京に住む、その妻紅蘭も詩をよくせり。頼山陽名は襄は安藝の人、春水の子、京に居る、著はすところの日本外史、日本政記等世に喧傳す、なほ當時備後に菅茶山あり、詩名中國に高し。

宣長とその門

眞淵起りてより國文學の勢盛んに、殆ど漢文學を壓す。その

門人多きが中に、關西の本居宣長、江戸の加藤千蔭、村田春海等最も名あり。宣長鈴の屋と號すは伊勢松坂の人、紀州侯に仕ふ、その學、一に古道を明むるにあり、從來わが國最古の歴史は、専ら日本書紀を取りしが、書紀は漢文にてしるして古意を失ひたれば、古事記が古語のままに述べたるにしかずとし、銳意後者の註釋に従事し、卅五年をへて業成る。これ即ち古事記傳四十八卷にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを見るべく、實に契沖の萬葉集代匠記と併せて、江戸幕府時代國文學界の二大作なり。そのほか文法を論ぜる詞の玉の緒、隨筆の玉勝間等、著書頗る多し。和歌の作も多けれども、その長所にあらず。年七十二にして歿す(二四六一)。その子に春庭、養子大平あり。許多の門人の中に藤井高尙、および歿後の弟子伴信友、平田篤胤最も著し。高尙は備中の人にし

て、文章をよくす。信友に小濱^若の藩士なり、博覽強記にして、敬神尊王の念篤く、國史神典を修して倦まず、著はすところの書百種の上に出づ。篤胤は出羽の人、江戸に出ててつぶさに苦辛を嘗めしが、天資剛邁にして志を挫かず、遂に學を成す。その意、宣長より一步を進めて、その剛明したる古道を一の宗教とし、これを弘布して、儒佛の教を斥けんとするにあり。古道大意、古史成文、古史徵、古史傳等の著甚だ多し。

千蔭春海等

加藤千蔭^{ウツカ}、荒園^{ウツカ}また芳宜^{ウツカ}園と號すは、その歌文集うけらが花のほかに萬葉集略解あり。村田春海は、その歌文集を琴後集といふ。二人ともに江戸の人、遊樂を好み、歌文をよくすれども、學問は宣長に比すべくもあらず。千蔭はまた書をよくす。春海は漢文に通じ、よく和漢の文を折衷して、文豪の名頗る高し。二人とも和歌はその師の如く萬葉集を學ばず、むしろ

訓詁考證の學

平安朝に則れり。春海の門人に清水濱^{ハシ}臣、小山田與清等あり。その頃、橘守部また江戸にありて、一家の説をなす。著はすところ神樂、催馬樂、入綾^{イロ}等あり。江戸は日本一の都會となりて、珍品奇什こゝに集まれば、書籍もまた求めやすし、されば圖書を集めて、訓詁考證に餘念なき學者も少からず。盲人塙保己一、眞淵の門よりいでて、博覽強記なり。幕府に建議して、寛政四年(二四五二)和學講談所を設け、古書を集めて群書類從およびその續篇を編す。門人石原正明、松岡辰方等、制度故實に委し。屋代弘賢もその門よりいで、小山田與清と共に藏書家の名あり。狩谷掖齋、内藤廣^{ウチノ}前、黒川春村等も、博覽を以て世に聞ゆ。狂歌は詞の卑俗に、想の滑稽なる短歌にして、また太平を粧飾する一種の文學なり。既に萬葉集に滑稽の歌あり、江戸幕

狂歌

景樹の桂園風

府の世となりては、享保の頃、大阪の由縁齋貞柳など狂歌に巧なりき。さてこの時代に至りて、江戸の太平はその振興を促がし、狂歌師一時に輩出す。中にも四方赤良、大田南畝、蜀山人と號す。最も名あり。その門人に宿屋飯盛、石川雅望、六樹園と號す。北川眞顔、四方歌垣、また狂歌堂と號すあり。眞顔の狂歌はやゝ變じて滑稽といはんより、むしろ普通の歌を俗語にて詠みたるものとなる。狂歌と相並びて狂詩も行はれ、俳諧よりは川柳といふ野鄙なるものも出でたり。翻りて京都を見るに、文壇頗る寂寥なりといへども、なほ香川香樹の歌道を一新せるは、特筆大書せざるべからず。景樹（桂園と號す）は鳥取^{因幡}の人、壯年にして京にいで、和歌を學び、學成りてのち帷を下して子弟を教ふ。その説、蘆庵に近く、意は古の誠實なるにならひ、詞は今の通じやすきをとり、殊

に聲調を重んずるにあり。年七十六にして歿す（二五〇三）著はすところ古今集正義、土佐日記創見等あり。桂園一枝、同拾遺はその歌を集めたるものなり。門人に熊谷直好、八田知紀等あり。景樹の流を桂園派といひ、大いに世に行はる。

當時の短歌の例

しきしまの大和心をひととは、朝日ににほふ山櫻ばな。 宣長
（これはわが肖像に題せしなり）

夕風にさよる渚のさゝらなみ、水にも秋の聲はありけり。 千蔭
花はみな雲とぞ語る一言に、おもかげうかぶみ吉野の山。 春海
大堰川かへらぬ水にかけみえて、今年もさける山櫻かな。 景樹
埋火のほかに心はなけれども、むかへば見ゆる白鳥の山。 同
燈の陰にてみると思ふまに、文の上白く夜はあけにけり。 同

狂歌の例

春霞たちくたびれて、武藏野のはら一ばいにのばす日の脚。 赤良
時鳥なきつる跡に、あきたる後徳大寺のありあけの顔。 同

小説の種類とその作者

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してたまる物かは。飯盛
あらそはぬ風の柳の絲にこそ、勘忍袋ぬふべかりけり。真顔

戯曲小説は、京には殆どその跡をたち、大阪にはたま〜戯曲類をつくるものありといへども、微々として振はざるに、江戸における小説類の發達は甚だめざまし、その種類には一枚毎に繪を挿みたる草雙紙、繪を少くして文と想とに思を凝らせる讀本、遊子賤婦を旨と寫したる洒落本等あり。これらの作者には、山東京傳最も早くいでて、名聲一時に鳴る。その著は稻妻表紙、本朝醉菩提等あまたあり。曲亭馬琴少しく後れていで、學問該博に文藻絢爛、その著いづる毎に世人争うてこれを求め、紙價ために貴し。その作多きが中に、椿説弓張月、里見八犬傳、夢想兵衛胡蝶物語等最も名あり。十返舎一九は東海道中膝栗毛等、式亭三馬は浮世風呂、浮世床等を

著はし、二人ともに滑稽を旨とす。柳亭種彦は源氏物語を翻案せる修紫田舎源氏等を作りて表紙挿畫に意匠を凝らす。爲永春水は春色梅曆、いろは文庫等をかけるが、汚濁なる文字多しとて、識者にいやしまる。

京傳と馬琴

こゝにあげたる小説家の中にも、京傳馬琴殊にすぐれたり。京傳ははじめ草雙紙洒落本を作りて、遊里の事情を穿ち、時好に投せしかば、聲名隆々とて、他の作者は及ぶ能はず。寛政三年(二四五)風俗を亂るとして禁錮に處せらる。これより京傳憤み畏れて教訓を旨とし、また讀本の著作に傾けりといへども、この方にては馬琴に及ばず。その著に近世奇跡考、骨董集等、近世の事實風俗を考證せるものもあり。馬琴瀧澤氏、著作堂と號すは幼より讀書に耽り、和漢の稗史類を涉獵す。はじめ草雙紙を作り、京傳の周旋によりて出版せしが、いまだ大名をなすこと能はず。讀本を作りてより、名聲日に揚れり。馬琴謹嚴にして高く居り、その小説も一に儒教によりて勸善懲惡を主とす。一生の著述二百に餘り、小説のほかには燕石襟誌、玄同放言等の隨筆あり。年八十二にして歿す(二五〇八)。

小文吾諷諷して高く舟水を論ず

(里見八犬傳第五十六回のうち)

引かれて對牛樓にうち登れば常武は婢兒等に兩戸おちなく開かせたり。當下、小文吾はまづ頭を回らして、彼此と見かへるに、樓上の東面には、僧一山が欸印ある。對牛彈琴といふ四字の額を掲げて、左右には、唐の王勃が蜀中九日の詩を白字に鏤りたる竹聯あり、時は今、夏と秋との違あれども、犬田が爲にはこゝも亦望郷の臺にして、北地よりくる鴻雁はなけれど、いざ言とはんと詠まれたる都鳥は今もありけり、かくて欄干に身を倚せてつくつくと見わたせば、天ははやあけし横雲の色紙めきたるに、筆はなけれど、誰が硯せし墨田河、前面に黒き牛島は宛も水に臥せるが如く、彼方に蒼き柳島は、絲よる濤に靡くに似たり。世間は何に譬へん朝びらき、趾なき如と、滿誓が詠みたる歌は、しら波に、漁翁生涯一葉の舟、東へ漕ぐあり、西に歌るあり、葛西村落幾戸の烟、南に沖つあり、北に滅ゆるあり、鎌田浮田行徳の浦々、あれ歎とぞ思ふ目も、迥に、登る旭をふる里の方とし見れば、翁さびし父のうへ又親戚のこと、胸に湛へてながらふる、かひこそなけれ、劔刀身を浮橋の中絶えし、この石濱の玉塵より敷しつもれる艱難憂苦の、やるせは絶えてなかりけり、常武これを慰め

て、犬田殿、々々々、いつまで物を思ひたまふぞ、尺蠖の伸びんとする時まづその身を縮むといへは、窮達時あり、運によるべし、あれあの船を見たまはずや、久しう水際に繋がれたるあり、又真帆あげて走るあり、繋ぎし船は走るべからず、走る船は留まりがたし、和殿が今の滞留も只この理をもて悟るべし、これをわが上に譬へていはば、君は船なり、臣は水なり、水はよく船をうかべて、又よく船を覆す、自胤は暗愚の弱將、莖麥をだも辨へ得ざれば、いかでか和殿を知るものならん、かの隣國なる敵の爲に滅ぼされんこと疑なし、某も亦千葉の一族、馬加光輝が姪なれば、代つて取るとも、誰か咎めん、されば享徳の例に倣うて、自胤に詰腹切らせ、わが兒鞍彌吾常尙を當城の主にせばや、と思はざるにあらねども、いまだ智勇の軍師を得ず、和殿今よりわれを佐けて、事成るときは、葛西の半郡を宛て行ふべし、うけひかれんや、と小膝を進て、また他事もなく、聶けば、小文吾聞きて貌を改め、こはおもひがけもなき密議を談せらるゝものかな、某素より學問せざれば、聖の教はよくも知らねど、譬を取りて利害を推さん、貴所は只水と船との反覆を説きたまへども、順逆の理に暗きにあらずや、いかにとなれば、水の船をうかむるは、經なり、その船を覆すは、變なり、苟しくも只その變を己が利として、その經を取らざるものは、亂

臣賊子の心なるべし。君臣禮あり、舟車に楫あり、君臣禮を失ふときは、舟車に楫を失ふが如し、一旦その利を得るといふとも、滅亡せんこと疑なし、その君を弑せしもの、誰かその久しきを保ちたる。希望コトシガくば非義の妄想を除き去りて、千葉家の諸葛といはれたまはば、徳誼後世に芳流して、子孫餘慶を承くることあらん。某武藝を好めども、短才にして文學なし、いかでか人の佐となるべき。只その志す所は、忠信の狗となるとも、亂離の人とならじとのみ、念ずるの外は候はず、と憚る氣色もなく答へしかば、常武は勃然と怒は面に見はれても、手を叉きて物いはず。

嘉永以後の風
かくて嘉永以後は、幕府勢を失ひて諸侯これに服せず、歐米諸國しきりに開港を迫り、志士天下に横行して、尊王攘夷の論を唱へ世の中甚だ騒がしく、人心洶々たれば、文學は漸く衰微して、見るに足るものなく、かくて明治維新の代に及べり。

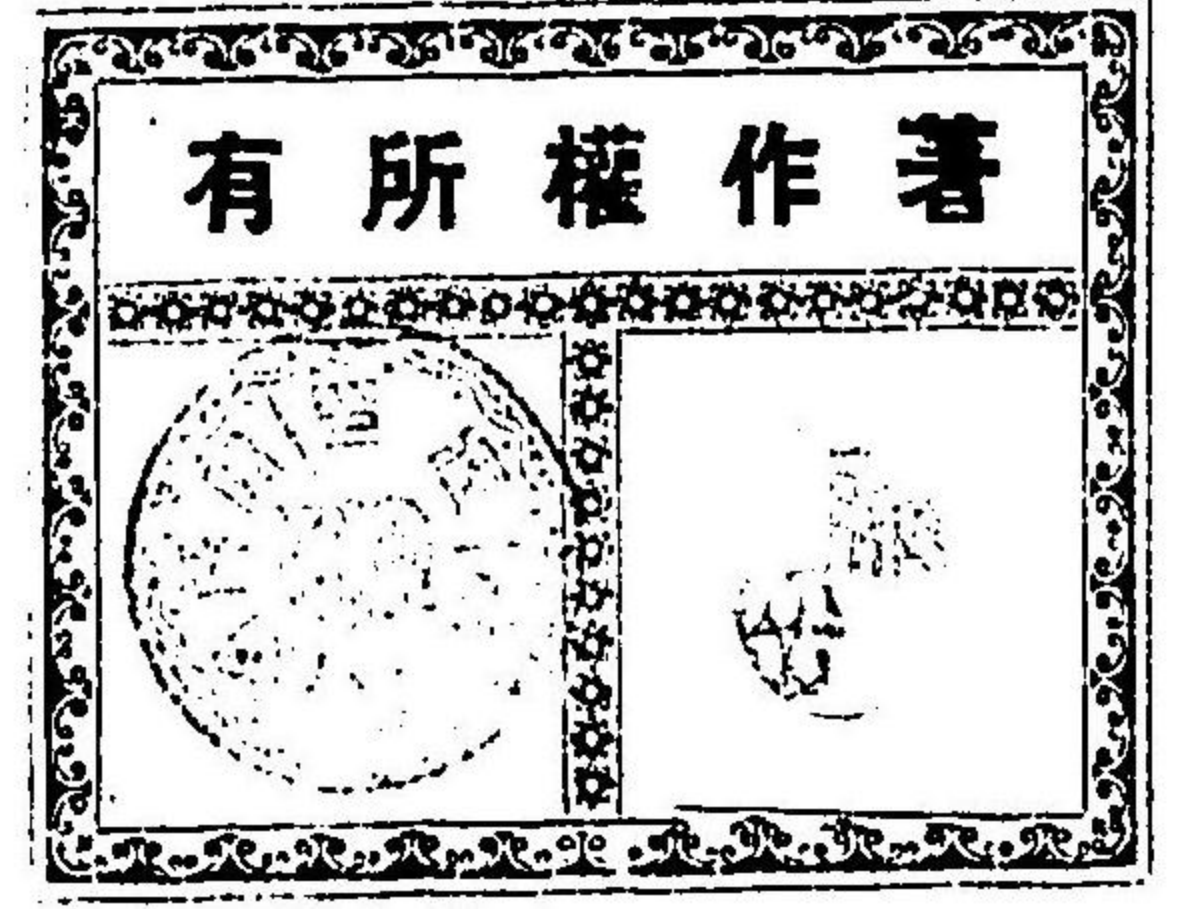
結論

以上、明治維新までを四期に別ちて、文學變遷の大體を述べたり。上古の古朴は發達して平安朝の旺盛となり、鎌倉室町幕府の世に頓挫して、再び江戸幕府の世の隆昌となりぬ。かくて維新の改革は社會の種々の方面に大いなる變動を與へたり。従來勢力を占めたりし漢學は棄てられ、これに代りて西洋の文化は高潮の如く注ぎ入りぬ。歐米文學の研究は、邦人の思想にも、文章にも、その影響甚だ著し。國連日に揚り、文化しきりに進むと共に、國民の自信も生じ、外國文學に併せて國文學の研究も盛んなり。文字文章の論漸く喧しく、漢字の廢止を唱道するものあり、言文の一致を主張するものあり、相論じて文體いまだ一に定まらず。俳句、新體詩等に筆を染むるもの續々いづれども、歌道の刷新いまだ成らず。また歐米物質的文明の感化をうけて道義を重んずる念薄く

なれば、小説の着想の如き、讀むに堪へざるもの少からずといへども有識の士に公私の徳義に改善を計るもの多ければ、この弊も次第に減ずべし。要するに當今の文學は、今や改新の半にあるものといふべし。

日本文學史教科書終

明治三十四年九月二日印刷
明治三十四年九月九日發行



116
135

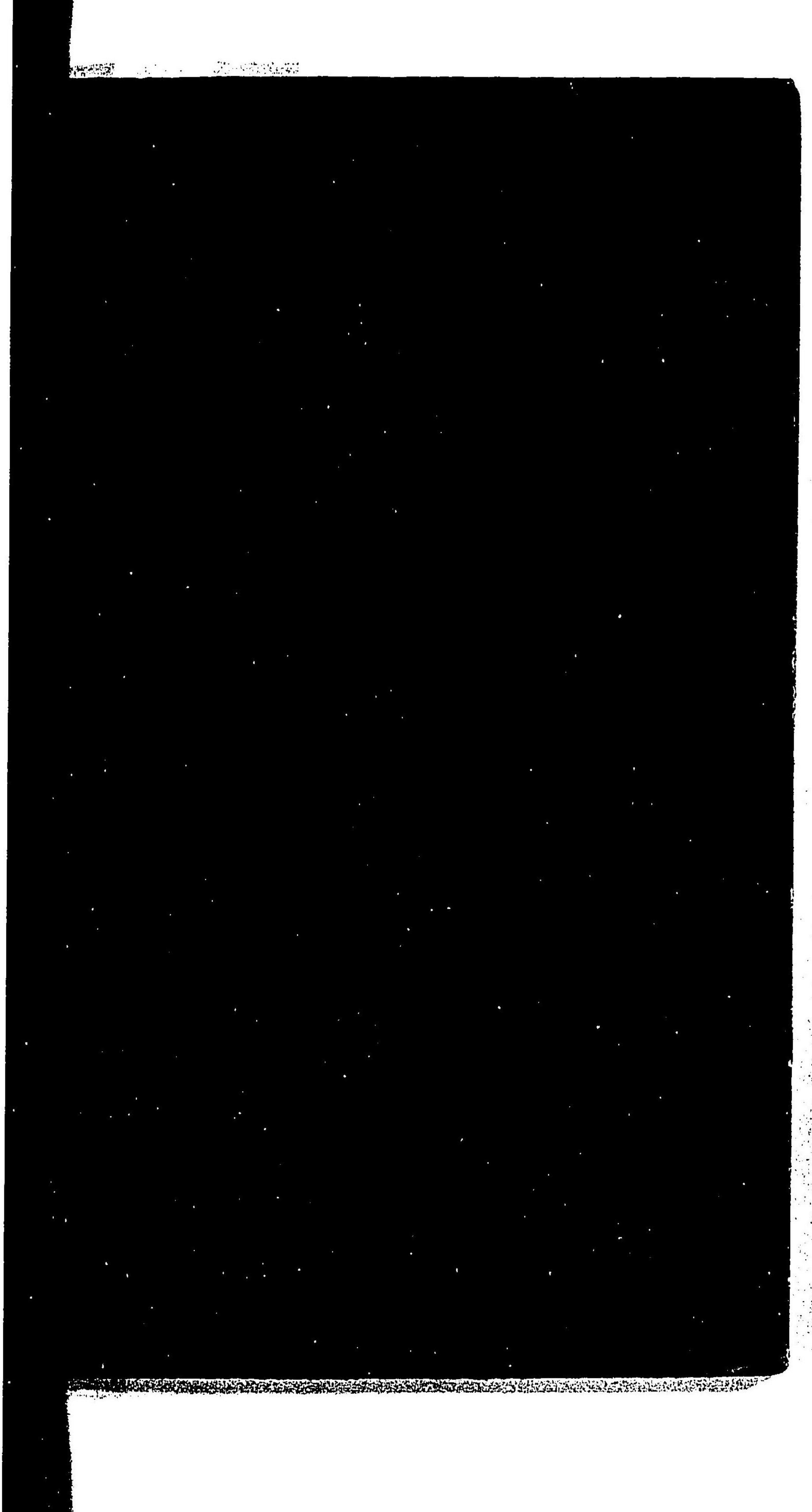
著 者 藤 岡 作 太 郎
發 行 者 西 野 虎 吉
發 賣 者 三 木 佐 助
印 刷 者 野 村 宗 十 郎
印 刷 所 株式會社 東京築地活版製造所
發 行 所 東京 関 成 館
發 行 所 大阪 関 成 館

東京市本郷區丸山新町二番地
東京市小石川區小日向水道町七十三番地
大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷
東京市京橋區築地三丁目十五番地
東京市京橋區築地二丁目十七番地
株式會社 東京築地活版製造所
東京市小石川區小日向水道町七十三番地
大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角
（長距離加入）電話番町三五五番
（長距離加入）電話番町三五五番
（長距離加入）電話番町三五五番

日本文學史教科書與附
賣價金四拾五錢

116

135



116
135

日本文学史教科書

084960-000-2

116-135

日本文学史教科書

藤岡 作太郎/著

M34

DBB-0349

